

292.21

H228h

原田藤一郎著

實踐地誌
北清事情

青木嵩山堂藏書

026664-000-2

292.21-11228h

北清事情

原田 藤一郎/著

M27

ADD-0353



東京都千代田区丸の内二丁目十二番館六号四二室
芳澤中國記念事業財團
電話(28)四一〇八

原田藤一郎著



實踐
地誌
北清事情

青木嵩山堂藏書

東京都千代田区丸の内三丁目十二番館六号四二番

芳澤中國記念事業財團

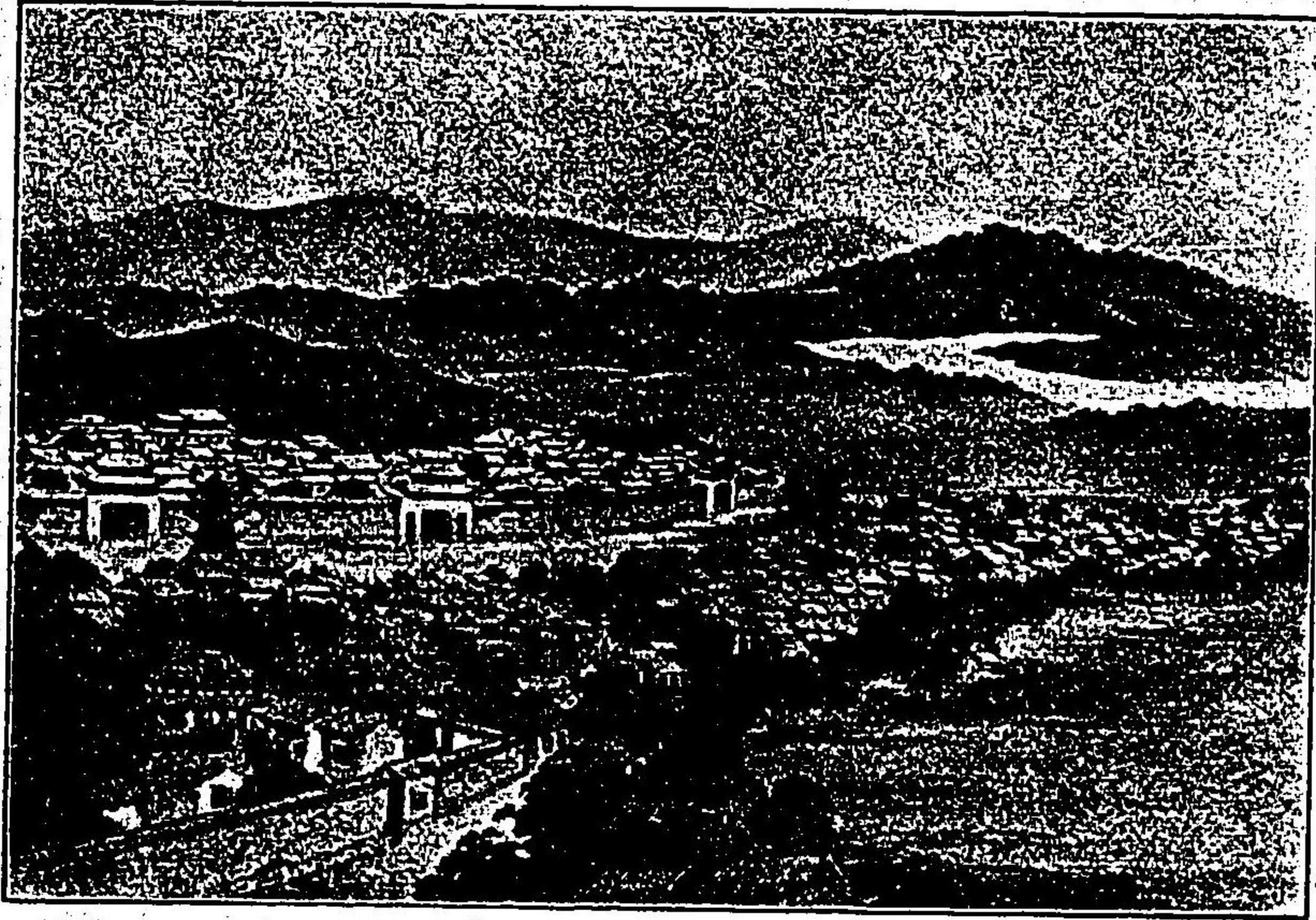
電話(28)四一〇八

原田藤一郎著

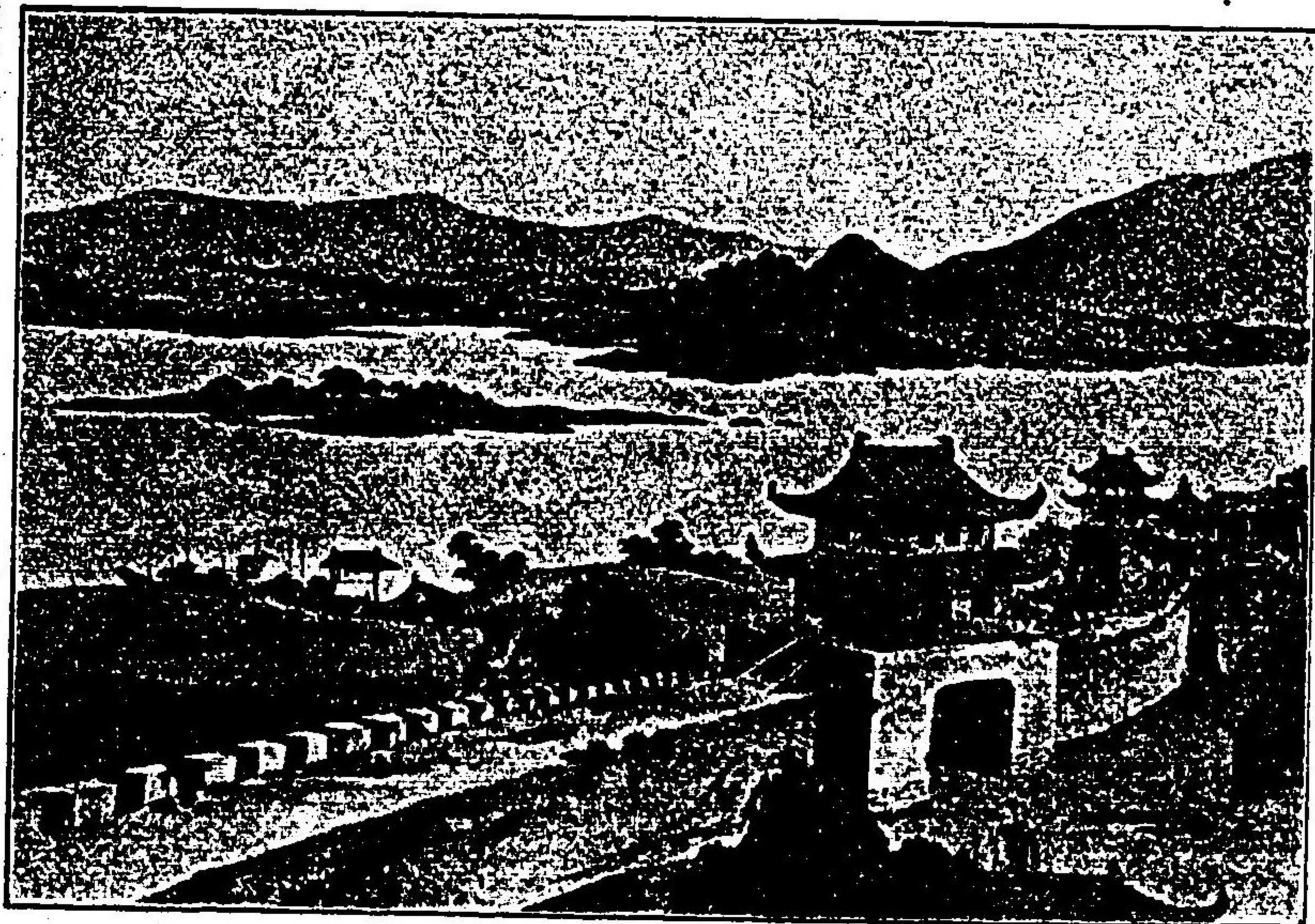


實踐
地誌
北清事情

青木嵩山堂藏書

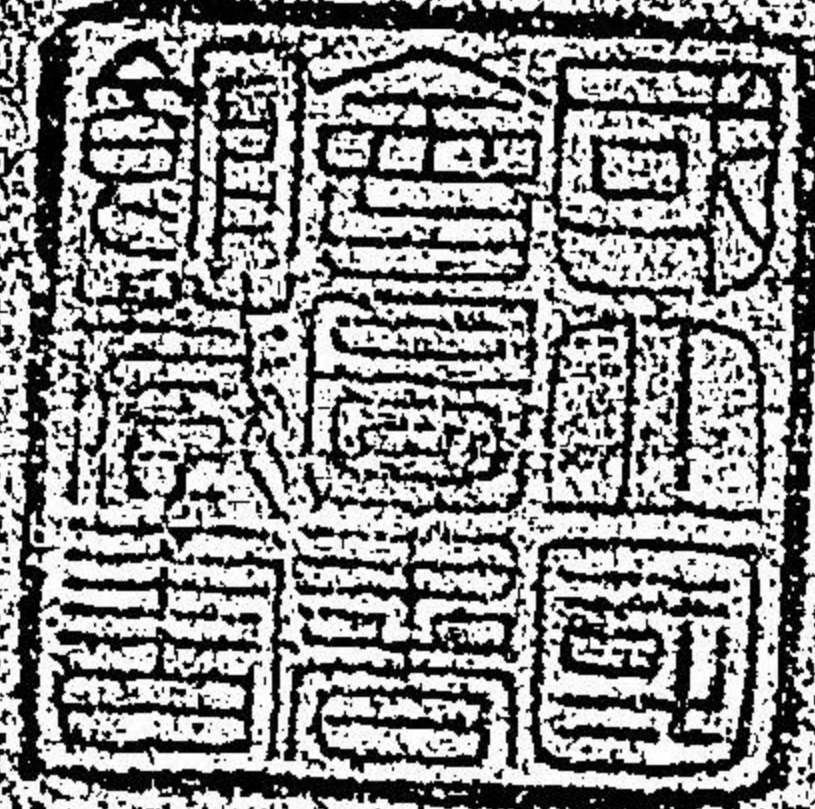


圖ム望ヲ山柱天ヲ隔ヲ河渾リヨ府天奉

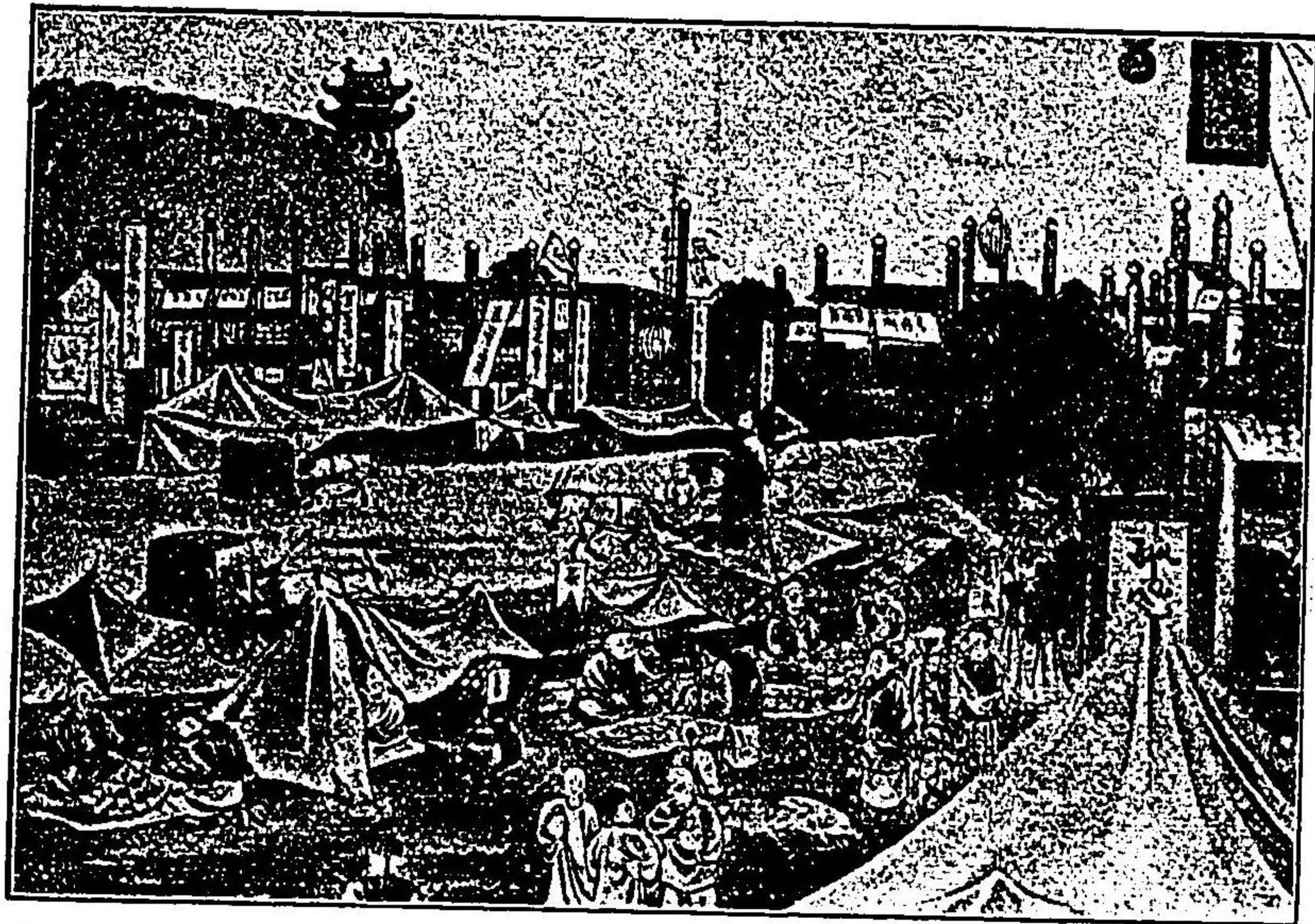


圖ム望ヲ城連九リヨ城洲義

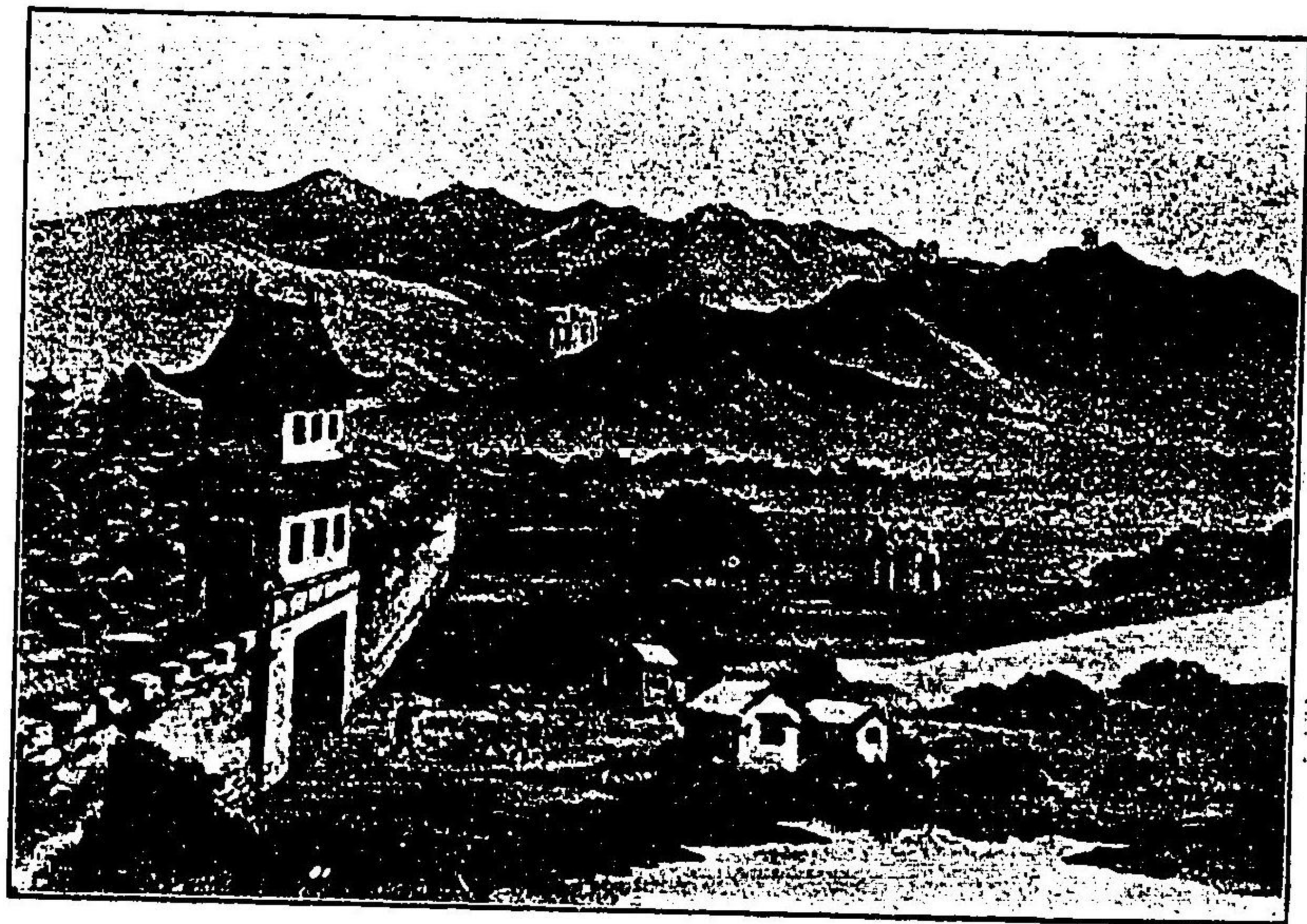
292.21
H228R



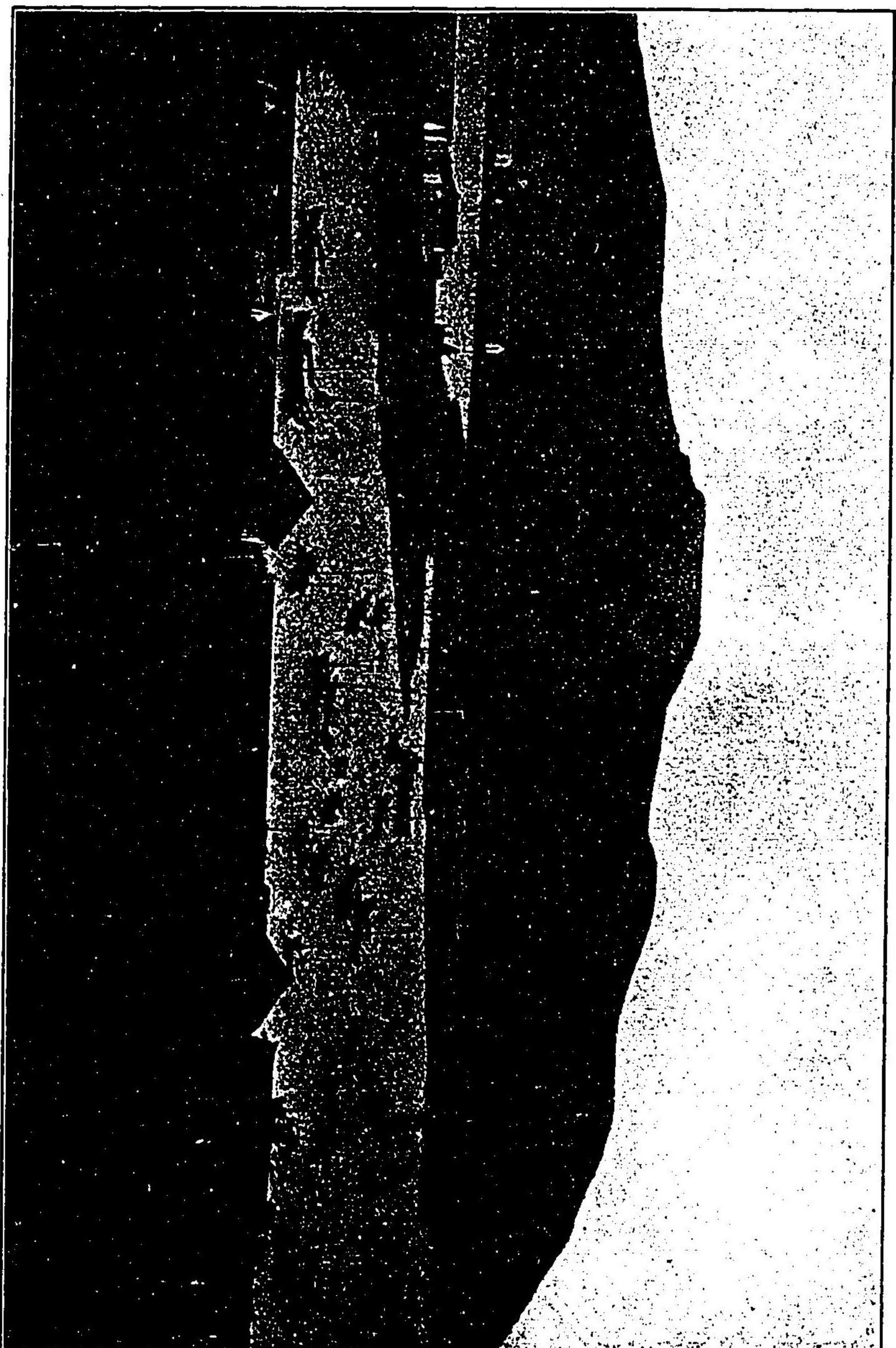
513110



北北京市街之景况



山海關之真景



圖ノ臺砲口順旅

萬壽山離宮ノ圖



北清事情自序

兵書に曰く「勝を知るに五あり以て與に戦ふ可く以て與に戦ふ可からざるを知る者は勝つ、衆寡の用を知る者は勝つ、上下欲を同ふする者は勝つ、虞を以て不虞を待つ者は勝つ、將能にして而して君御せざる者は勝つ、此五つの者は勝を知るの道なり、故に曰く彼を知り已を知る百戰殆ふからず、彼を知らずして已を知る一勝一負、彼を知らず已を知らざれば毎に必ず敗る」と清國人の戦時に於ける眞に彼を知らず已を知らざるもの、故に彼は戦ふ毎に必ず敗るゝなり、彼等が平時我國を見る邦人の伊豆七島を看ると同じく其静岡縣に屬するか、將た東京府に所屬するか之を詳かにする能はざるが如し、茲を以て邦人の清國內地にあるや彼國人等の常套として質問

(二) 北清事情自序

する所は大概ね日本の所屬なり彼等は曰く日本は清國何省中に屬するや或は日本の貢物として大清朝に供するものは如何日本國王の姓名は如何と彼等の無禮にして且つ蠢愚なる以上の如くなれば又其我大臣を看るの感念も即ち伊豆七島の戸長或は什長に異ならざるべし

清國內一地方に騷亂あるや他方の民は謳歌横行敢て之を知らざるものゝ如し況ん哉現今朝鮮内日清交戦の如き彼等の未だ夢想せざる處とす彼等は一年或は二年の后ち漸く之を詳知すべし到底我國人が一電の飛報と共に國旗を擧げ太白を捧げて歡喜憂愁すると同一理の民衆にあらす

以上述るか如き國情なれば予輩の其事情を書するに當り實況を寫出せんとするの難き眞に意想の外に出るもの少なか

(三) 北清事情自序

らす殊に彼等が無禮無恥不潔無智等に到ては到底之を書寫する事能はざるなり蓋し這は予輩獨り然るにあらざるべし一回清國に入り彼の國人に接近し以て實狀を詳悉せん乎何れも此憾を免かれざるを知る

今や北清事情を書し終り更に之を再讀するに當り又其眞情を穿つの切實ならざるを恨む然れども之れ筆者の罪にあらすして彼か國情の然らしむる處とす讀者幸に予の意を了し以て閲讀の榮を賜ん乎時に或は我を知り彼をしるの一助たらん耳茲に清國の愚を表し以て爲自序矣

東京森元街於茅屋

氷山謹誌

(一) 軍事上の觀察

實蹟
地誌

北清事情

軍事上の觀察

亞細亞大陸
單身旅行者 原田藤一郎著

予が清韓露三國を跋渉せる日誌は之を刊行せしを以て世人は既に知悉せらるべし然れども其記する所多くは農工商と人情風俗にあるを以て平時に在て貿易業に従事せんとする人には多少裨補する所なきにあらざる可しと雖も現今の如く日清韓三國交渉の場合に當ては未だ彼の日誌を以て満足するに足らず是れ予の常に遺憾とせし所なり今や日清の交渉益々開にして國人皆清國內の事情を知らんとするや切なり是に於てか聊か卑見を述べて以て世の参考に資せんと欲す

清國北方の兵備は其第一關門を旅順口と爲す盛京省の南端全州の管下にあり山東省の威海衛と相對し常に衛兵を置き以て不慮に備ふ而して其砲臺は年々増築して昨今は稍や整頓せり威海衛は即ち旅順口の對岸なる要港にして兩々相據て以て唯一の海防と爲すものなり然るに旅順口は海灣狹隘なるが故に艦船の碇繋に便ならず故を以て艦船は常に威海衛に碇繋し不時の變に備ふ芝罘を相距る南數里北洋艦隊の碇繋場にして我鎮守府の少なるものなり英人某を以て顧問と爲し砲臺の築造港内の警備共に屹々たり清國海軍の未だ發達せざるや旅順口の砲臺を以て樞要とせしも今や北洋艦隊の組織と云ひ渤海の警備と云ひ變じて本術を以て唯一の要港とするに至れり去れば衛内の構造を秘する甚だ嚴なりと雖も其設計方法一に外人に頼るを以て時に英人の口に依り若くは他の事情の爲りに早く既に内部の秘密を暴露して外人の之を知るもの所謂公然の秘密と評するに至れり

次は太沽砲臺なり天津河口即ち白河河畔にあり北京天津の防禦上最も緊要の地區と爲す而して其沿岸數里は一面の淺洲にして唯た白河の流域のみ漁船の行通に便なり故に若し其砲臺を攻撃せんと思せば砲擊者の不便少からず未だ渤海全體を探究せざともあらず去れど一害は一利の存する所海中の泥砂堅硬にして馬車を疾驅するに容易なるの處少なからざるは實に一奇と云ふの外なし

天津は北京城の咽喉殊に直隸總督李鴻章の駐在地なるが故に外交の要務概ね本地に於て決行せらる去れば其防禦も一層の嚴重を要する素より論を俟たず是れ李鴻章の手兵として精練の西式兵三萬ありと世評する所なり然れども清國の兵備は五十を以て果五〇三萬の實數ありと吹聴するの習慣あれば李の兵數は三〇

(五) 軍事上の觀察

日ならずして忽ち城下の盟を爲す又故なきにあらざるなり
東三省の兵備は第一を山海關と爲す次に錦州府營口等多少の衛
兵あり然れども是れ皆清國普通の孱弱兵にして戰時の要を爲す
可しと思はれす抑々營口(即牛莊港)は瀋陽の東南にあり春夏秋の三期
は内外船の出入あるも冬期は河上氷結して交通全く絶つに至る
河口の左右に三個の砲臺あり常に兵を置て不時に備ふ盛京省の
首府奉天府は滿州將軍之に駐在し東三省の政令を司る兵備は清
國中央部に勝る萬々なり稱するも實に見れば北京の滿蒙八
旗及び他地方の警備に比するに多少の實ありと雖も若し我
日本を以て之を見し其兵は精銳にして懼るゝに足らず何とな
れば彼が西式の兵を稱するも其數は僅かに一千五百他は皆農兵
或は博徒の類を集めて支那風に訓練せし普通兵なり是等は
非常の際に於て或は一萬七八千の數に補充し得んも平時は一千

(四) 北清事情

萬餘方里の土地とを有する大帝國の首府も英佛聯合の一軍に旬
にも彼が功績として書するに足るものなし四億の衆と七十六
佛の聯合軍に如何なる名譽を擧げ得しにか長髮賊十七年間の反
は流石に日本に如何なる本分なるべし然るに彼が十五萬は嘗て
りたるが尙ほ其没落に當てや義兵を擧げて華を極め遊惰に耽
成せり五千人の實數も其多くは我輩の丁壯人足夜番等の雜類を以て
るに五千の一年一回の檢閱の時式稱する者を見れば氣の毒の思
外に五千の一年一回の檢閱の時式稱する者を見れば氣の毒の思
ななきにあらざるなり稱するも氣の毒の思
數は如何に眞に實數を記するは清國の爲め最も氣の毒の思
北京は帝都にして滿蒙八旗十五萬の衛兵ありと稱す而して其
を實に見するに如何に底三萬の兵を容るに足らざればなり
萬あるも現に如何の外に少數の兵は非か何とあらば其兵營の有様

北清事情 (六)

餘の雜種兵を各地に派し以て行政事務の補足と爲すに過ぎず吉林黒龍の二省も盛京省と同一の兵備あり蓋し露國に對する護衛兵の必要あれば盛京省位の兵備は之を爲すものならん興京は清帝の起業地にして如今は興京廳を置き大祖の陵墓を保管せしむ兵備とては別に見るものなし應は昌圖府の管下に屬せる山間の一小都府にして支那風の城壁を築かず自然に市街を造りたるは幾分か我國に類似するの感あり予は常に高祖の源姓を探らんと欲し屢々源姓の有無を問ひしに初めはありと答ふるも之を精査すれば遂に不知と答ふる予の朝鮮國義州に若するや清國の駐在官電信局長知州張迂經に會す張は殊に余を厚遇し以て旅行の便を與へたる者なり予は其會話に際して先づ源姓の問を起せり我聞滿州有源姓真然乎否哉清書圖書集成一萬卷中有圖書輯勘一百三十卷雍正帝自序曰朕姓源義經之裔其先出清和故國號清云々張答へて曰く有書考之而官民均不言也と是れ吾人の最も講

軍事上の觀察 (七)

究すべき問題なりとす若し夫れ我が源義經果して清皇の大祖たらん乎我は即ち其祖國たり清國人の故例を重んずる世界無比と稱するが故に今彼の住民にして此故事を知らば商業上其他に便宜を與ふる實に鮮少ならざるべし加之ならず清人は常に我を許して東海の一孤島と云ひ或は日本國對清朝何等有貢物哉又日本者在清國何省之中乎云々の言を爲す斯る傲慢無禮の言は其帝王の祖國が日本なるを知ると共に忽ち雲烟霧消するに至らんか朝鮮國境に接したる所開鴨綠江沿岸の地は近年の開拓にして今より十數年前通化懷仁寬甸等の諸縣を新置し徵租斷獄の事務を執る夫より東北の地は吉林省の管下に屬すと雖も久しく馬賊の長韓顯宗なるもの長白山の麓に住して官命に従はず屹然獨立の体面を爲したりしが顯宗死して其子某之を相續したるも威權父に及ばず漸次勢力を失し今は統一の力なしと云ふ然れども吉林の政令は今猶此地に及ばず依然として舊態を存せり

黃海の北岸即ち朝鮮國義州に對する清國の九連城は單に清韓陸上の貿易地として一の税關を設置するも別に兵備を爲さず最も鴨綠江の中間(所謂中州)にある出張所及び税關には二十名若くは三十名内外の兵丁あり遣は皆雜役に供する使丁にして兵備と云ふに足らず彼等は朝夕兩度支那流の喇叭を吹き金鼓を打ち鳴らしして最後に大砲一發を放ち以て置兵と裝ふのみ
清國北部の兵備は旅順口威海衛太沽天津奉天府を除きて他は兵備ありと稱するに足らず平時は府縣官の從者とあり若くは飛脚となり職丁と爲る所謂行政事務の使丁は清國兵の常務と言ふに過ぎず其數も三百と稱するは三四十五百と稱するは四五十にして猶且つ彼等は糧食の準備なく醫官を備へず而して府縣長官より給與する僅かの給料に依つて糊口するのみ故に戰時は國內に充満する無頼の徒を募集して兵丁に供せり然るに古來實戰を爲すこと稀にして常に虚勢を張り一万を以て十万と稱し五千を以て

五万と唱へ敵なきの地に於て縱横無盡に騎歩兵等を馳突せしめ以て敵軍をして其風聲鶴唳に驚き自から潰走するを待つと云ふ所謂孫子の「不戰而屈人之兵善之善者也」と云ふを學ぶものなり是に於て乎英佛の同盟軍は直に其首府を衝き旬日を出でず城下の盟を爲さしめたり因是觀之彼れが十万と云ふものは其實一萬と算し出師なせよ云ふも二三年の後にあらざれば爲し能はず假令三万五万の兵數ありとするも素と是れ鳥合に過ぎざれば決して歐洲及び我常備軍の對手とするに足らざるや最も明かなる事實とす猶に朝鮮に日清の交戦あらんとするや清人は例の虚喝手段を以て李鴻章己に一万の兵を送れり或は南北洋の艦隊は朝鮮某地に集合せり或は平壤に義州に幾多の清兵を派遣せりと傳ふるもの既に其幾回あるを知らず然れども現在の派兵は獨り牙山にありしのみ彼が實際に於ては糧食亦く輜重なく加ふるに政府内度の困難なる決して數万の兵を一時に派遣するの實力實勇あら

さるや明かなりとす

北支那の道路

清國人の道路に於ける敢て其交通運輸の不便を思はず時に一地
方の長官等が強制して之が修築を計るや何れも紀念碑を建設し
て後世に傳ふ蓋し道路の修理は善政の一と爲すを以てなり然と
も農民の愁客なる途に公道を耕鋤して已が畑地と爲す是に於て
か坦々たる平路も時に斷續して一定ならず或は小道數條に分岐
する如く又忽ち合して一大道路と爲る斯くの如きは天津北京間
に於てすら屢々之を實現する所なり况んや他の地方に於ける道
路の如きは眞に想像の外にあり殊に北京より山海關に至るの途
上及び營口より奉天府に至る中間は數千里に渉るの沼澤ありて
道路は變じて河川となり河川は氾濫して田野を掩ひ春夏秋三期
の旅行は最も困難を極む唯其冬期四ヶ月間は河川沼澤總て氷結
するが故に旅行頗る便なり是れ滿州各地方に於ける商業冬季に

盛なる所以にして且つ交通運輸の便自由なればなり彼の英佛聯
合軍が北京を衝くの途上人筏を造りて以て進行せしとの舊話
其實地を踏査して初めて彼が當時困難の情を思ひ遣られたり山
海關より營口に出づるの道路は丘陵起伏の間悉く海岸に沿ひ一
里乃至二里を隔て、順序よく宿驛を設けし旅人の便少なからず
錦州より奉天府に至るは北西の山際を通行して沼澤を避く營口
より奉天に至るも其の南東山際の地海城遼陽東京城等を過ぐれ
は全く沼澤を避くるを得べし奉天より吉林に至り及び興京に至
るの道路は沼澤なしと雖も渾河の沿岸に添ひて東上するを以て
時々渡川の難を免かれず元來清國官民の無頓着ある公道をも之
を修繕せざるが故に橋梁の如きも亦殆んど介意するものなし盛
京省中には遼東及び渾河の外大河なしと雖も其本部は平地少な
くして山野多く溪谷亦少しとせず是れ沼澤なきも河川の結氷時
機を以て大に行通の便を稱する所以なり

情事清北 (二一)

朝鮮國境に接する鴨綠江沿岸の地及び東方滿豆江沿岸は大小山脈連亘して頗る行路難を稱するの地あり即ち長白山、白頭山、帽兒山等はその大なるものにして小嶺小峯殆んど數ふるに暇あらず然れども清國本部住民の増殖は追年甚だしきを加ふるより漸次東三省も移住民多く現今にては如何なる山間僻地と雖も到る處人烟を見ざるなく政府も今より十數年前新府縣數個を設置し牧民の業稍や緒に就くに至れり新府縣は昌圖府、通化縣、懷仁縣、寬甸縣、沙河縣、興京府、鳳凰縣、岫巖縣等なり去れば新道として特に工事を起し以て開墾するにあらざるも自然の通路は一定して彼の本部諸省中の如く斷續りなしと云ふにあらす不完全の小道ながら甲地より乙地に連續するは實に山中の一奇事とも云ふ可きなり

今其道程距離の概略を記るさば左の如きものならん

北京天津間 我廿五里 北京山海關間 我六十五里

清國北方の氣候 (三一)

山海關營口間 同七十里 營口奉天府間 同五十里
 奉天興京間 同廿五里 興京通化縣間 同二十五里
 通化懷仁間 同四十里 懷仁寬甸縣間 同二十餘里
 寬甸九連城間 同廿八里 九連城營口間 同七十五里
 九連城旅順口間 同五十里 九連城朝鮮京城間 同百十里
 又我敦賀より朝鮮國咸鏡道馬島間は海路四百七十八哩にして咸鏡道を横斷し吉林の管下に入る直徑僅かに十數里にして此海路は緯かに二晝夜に達すべく咸鏡道を過ぐるは二日を要し都合四日間を費さば倏忽として滿州吉林管下に入るを得へし軍事上商業上決して忽にすべからざるの要路と云ふ可し

清國北方の氣候

大陸の氣候は固より我國の如き清涼穏和ある能はず邦人或は思ふ春夏秋冬温暖にして四季花卉を絶たざる者は是れ地球上自然の風土氣候なり米國に歐洲に應に我に勝るの樂土あるべしと而

(五一) 清國北方氣候

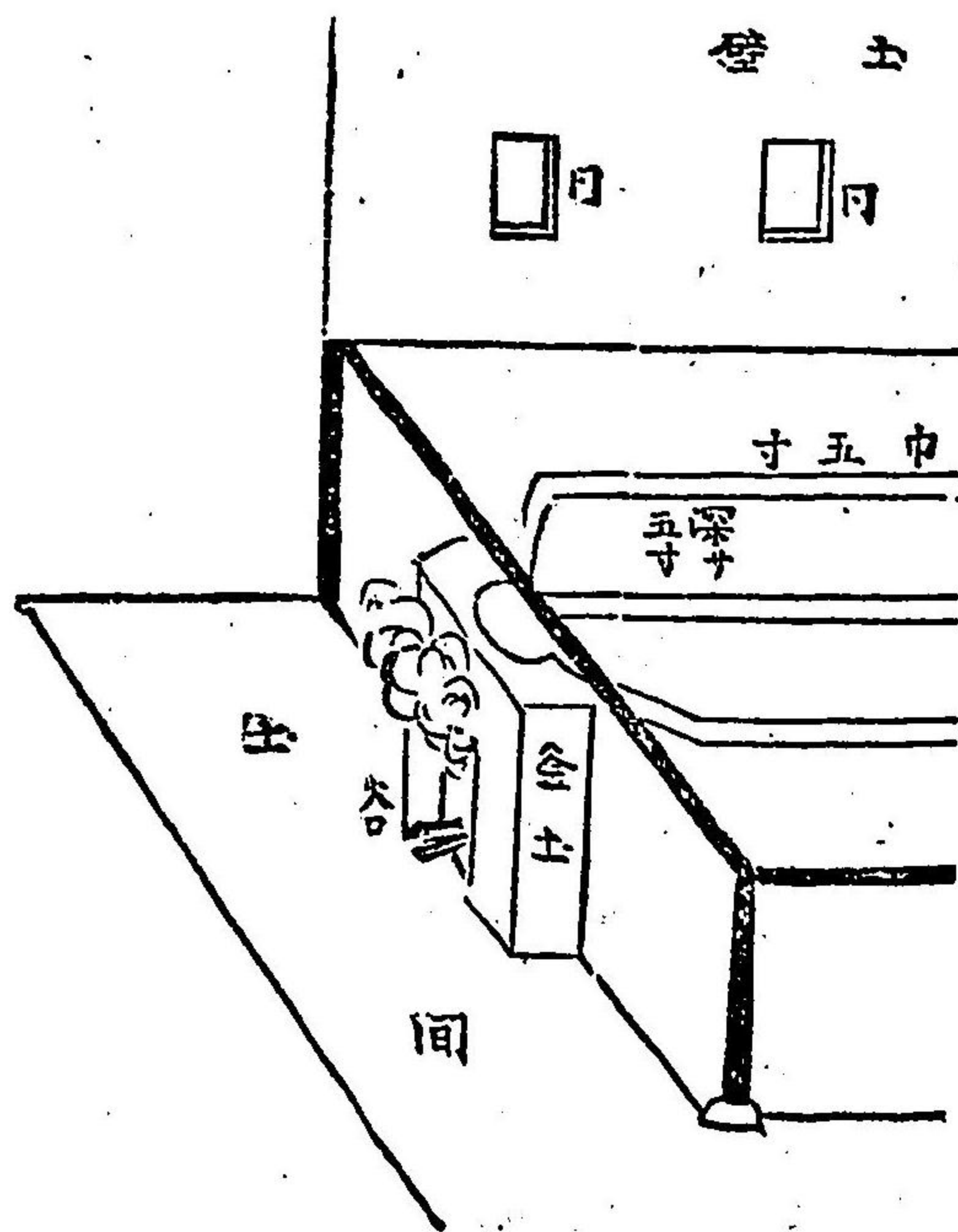
は高々な少抑々氣候と人身の關係は今茲に驟々を要せざるも予
の旅行中殊に深く感せしものは此の一事なりとす彼の我北海
に於る屯田兵の父老の如きは常に悲み訴へて北海の嚴寒は到底
内地に棲息せし老人婦女の能く耐ふ可き所にあらす其初りや國
費の故を以て斯に移住せしも幸に在郷の日に斯る嚴寒を知らば
他に方角もあらしならんなき云ふと雖も想ふに是れ未だ世に防
寒の具あることを知らざるなり北海道のよして既に此歎あり若し
此を北支那及び西比利亞の地方に移さば如何彼の眉毛氷合し
氷柱となるに至らば我國人は將に凍死を免かれずと云はん然
れども露領イルクツク以北の地の如きは零度以下四十度以上
の嚴寒地に於て尙ほ且住民のあるあり彼等は常に北支那朝鮮
鹽の如きは之を溫暖の地と稱して又敢て其嚴寒を説かざるなり
蓋し寒地は寒地に適當するの家屋什具あり暖地又暑を避るに自
然の便法あればなほ

(四一) 北清事情

して我が優かに他に勝る者あるを知らず見よ我に在ては冬間
爐の必要を感せず夏間煩悶暑を凌ぐの苦を知らず是に於てか
かに北海道の小寒に手足を飽し南洋の小暑に瘴疫に罹る是れ
其氣候風土を詳悉せず防暑防寒と食物飲料に注意せざるの致
す所なるのみ北支那の緯度は我北海道と極庭せず然れども大陸
と海島の氣候は自然に異なる所ありて暑は焼くが如く寒は骨に
徹す暑の甚しきは九十五度乃至百度を示すことあり極寒は零度
以下二十度にして下降する其幾回なるを知らず只其我と異なる所は
暑中の短にして寒中の長き一事なり極暑は七八の二ヶ月にて極
寒は十一月より翌年二月に至る四ヶ月間とす予の奥京に入りた
るは十月廿日なりしか晝間の降雪積んで五寸以上に至る蓋し該
地方にては是を以て初雪と稱したり爾來通化縣に至る途上溪
谷は都て結氷し寒威最も甚だしかりし又朝鮮の京城と我京城は
緯度に於て差異なしと雖も京城の寒氣は我が京城より甚だしき

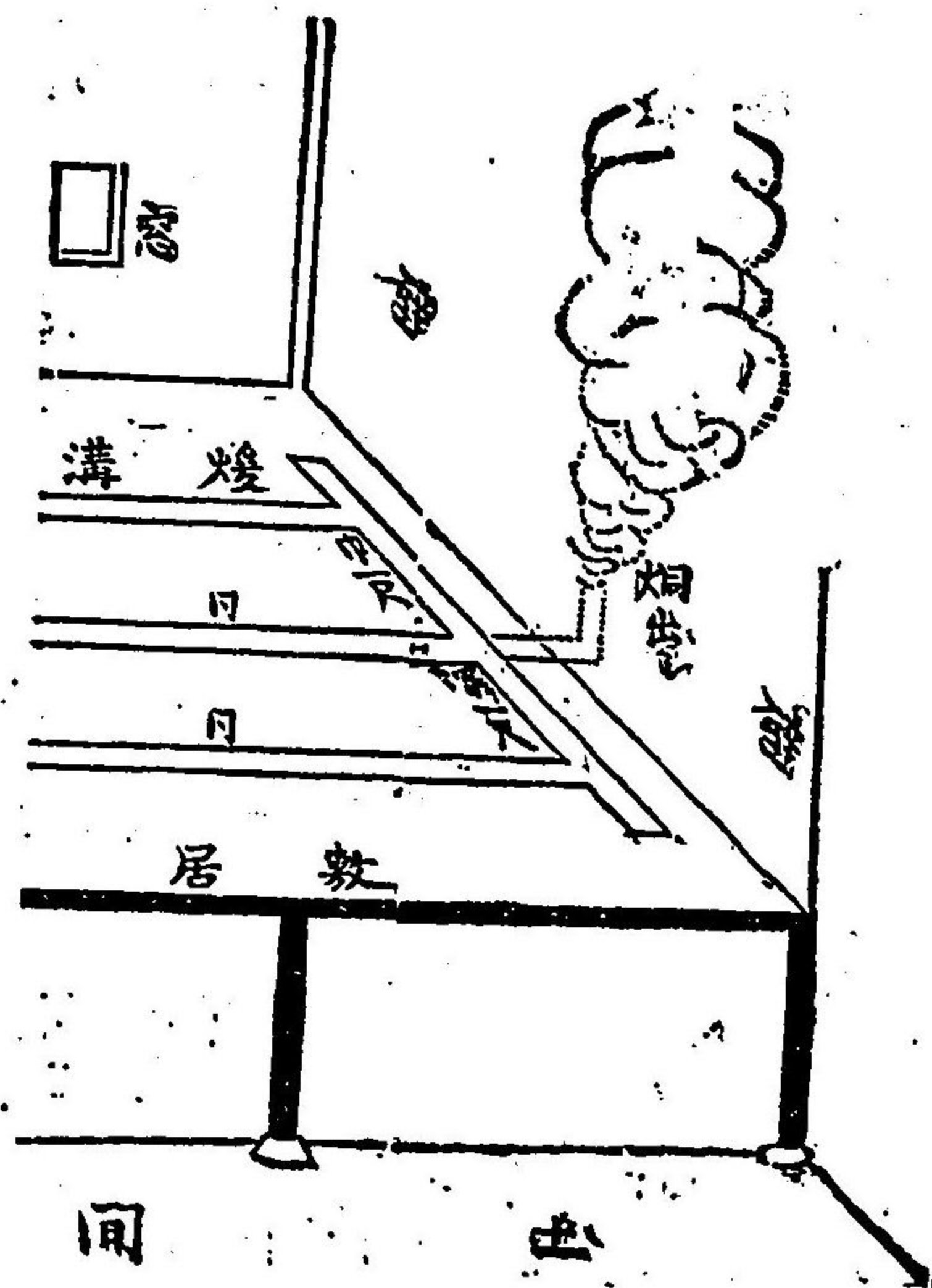
(七一) 清國北方の氣候

用せり高等の官吏及び有
 福のもの敷布團を用ふ
 るも掛け夜具あし予は南
 方即ち中央支那旅行の際
 は寝具として種々の物品
 を携帶せし北京以北は
 之を廢し所謂着のみ着の
 儘にして寸毫も不自由を
 感せざりし而かも中央支
 那の旅行は三月下旬より
 五月の末に渉り小暑中
 十一月の頃即ち小暑中
 を要し小暑中寒地の旅行に
 きにあらざるも這は皆家屋
 の構造防寒に適し相當の器具を備ふ



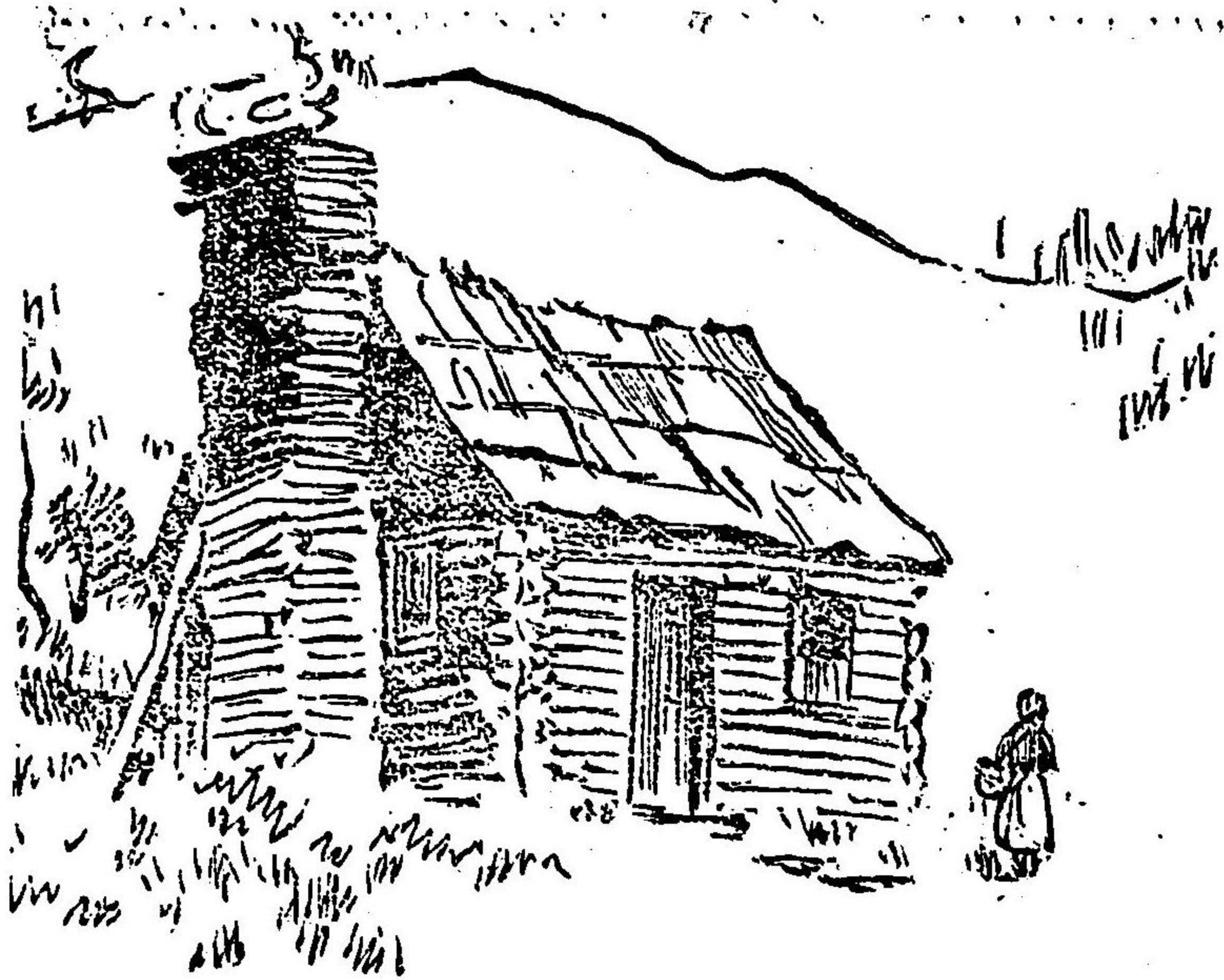
(六一) 北清事情

今試みに北支那及び朝鮮北部西比利亞等の防寒具即ち家屋其他
 の一斑を述べんに北支那の家屋は南方と其趣を異にし大家は室
 を設くる大概四個一室毎に煖爐あり其他は二室乃至一室にして
 而して四方の壁は皆泥土
 を塗り小窓數個を設く床
 上には手製のアンペラを
 敷きたるのみ朝夕の炊事
 に竈に火を點すれば焙煙
 溝中の傳ふて屋外に疎通
 し室中は常に温煖を保て
 り故に如何なる嚴寒も夜
 中寝具を用ひず唯其着用
 する衣服を以て寝具に代



(九一) 清國北方の氣候

も室内の温度は充分之を
 保つに足る露國造家は
 都て歐洲風と同じく煉瓦
 木造土造の三あり煉瓦構
 造は高等人士の家屋にし
 て農家兵屋は或は木造と
 し或は土造とせり殊に西
 北利亞は木材に富むを以
 て高等人士の家屋も亦木
 造のもの少なからず木造
 構法の少なき如し我が
 露國の木造は恰かも我が
 の奈良に存在する木組寶
 藏と同一にして二間乃至

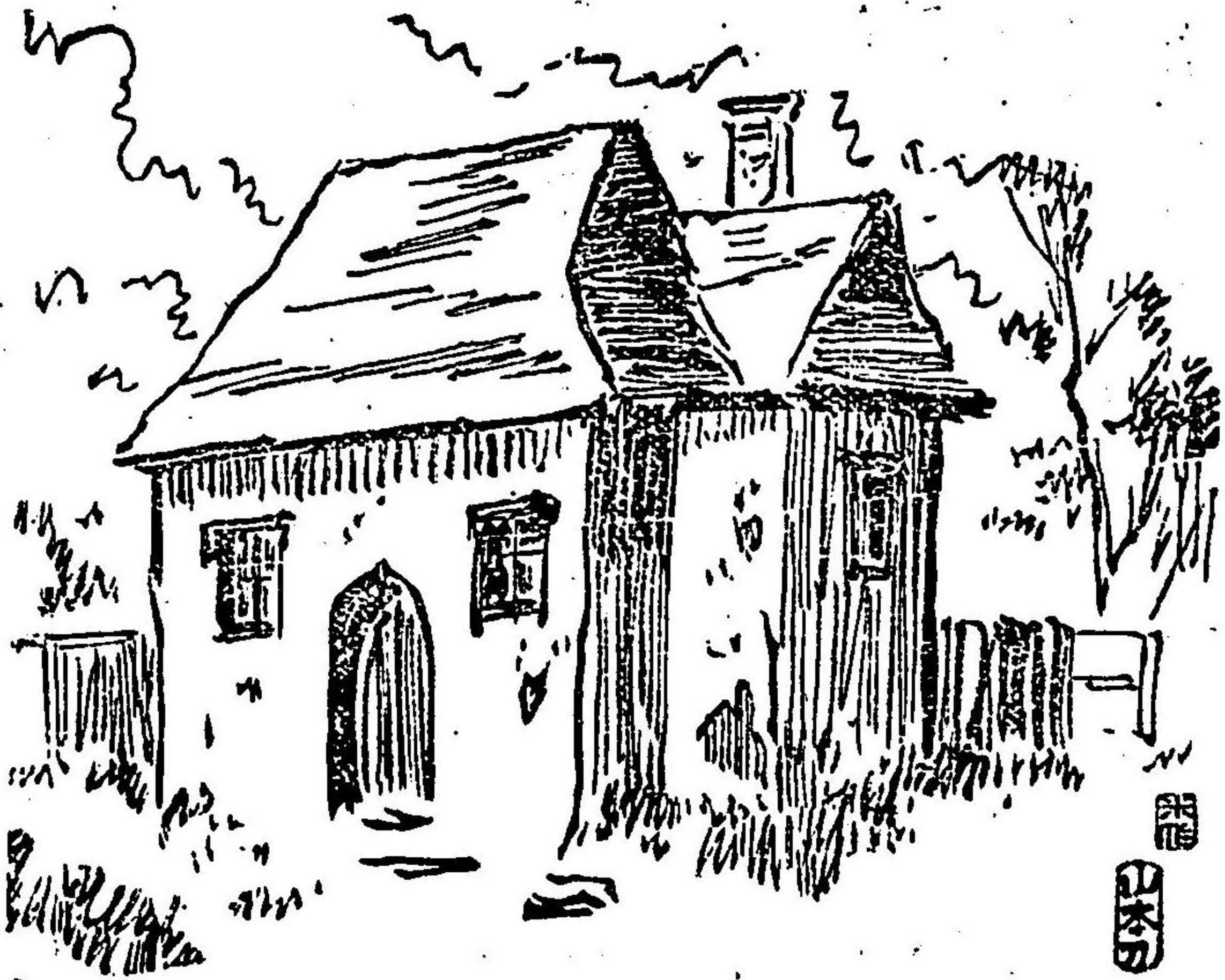


(八一) 北清事情

るを以てあり朝鮮國平安、黄海、京城、江原、咸鏡の五道も冬期の寒威
 極めて厳烈にして我北海道、比にわらず殊に其江原、咸鏡二道の
 如きは最も烈寒の地と爲す予の京城を出でしは明治二十六年一
 月廿日にして即ち嚴寒の最中にてありしなり日本居留地にある
 や常に大布圍二枚を敷き且つ上に掛布圍二枚を以てしたるも
 鳴の頃には身体次第に寒冷を感じて殆んど安眠する能はざる者
 屢々なりしが出發後は北支那と同一く一切の寝具を携せざる者
 しも敢て安眠を得ざる事なく殊に夜中は其着衣も之を捨て、僅
 かに毛布一枚を身に纏ひたるのみ朝鮮の家屋は大體に於て北方
 支那と異なる所なきも多くは屋内狹隘なり清國は跪坐の習慣な
 きを以て都て腰を掛くるに便利ある爲め室内皆な土間を設け朝
 鮮は我國の農民と同じく安坐して食事等を爲せば敢て室内に土
 間を設けず恰かも我が土廠内の如く四方土壁を以て圍ひ床下に
 暖爐溝を設けるなり露國は支那朝鮮と全く其構造法を異にする

(一) 清國北方の氣候

手袋を用ゆるも清韓人は之
 を用ひず其他耳袋あり狐皮
 の脚絆あり帽子あり何れも
 防寒の具と爲す
 今や日清交戦中ありれば海陸
 兵に防寒具の用意を爲さし
 むるは勿論の事なるが人夫
 其他にも亦之が用意を爲す
 にあらざれば危険の最も甚
 しきもの云ふ可し凡そ清
 國との交戦は假令戦時は二
 三ヶ月とすも其局を結び
 兵を撤するの場合は少なく
 一年乃至二年間の日子



(二) 北清事情

三間の丸太を順次屋上に組合せ内部は壁紙を以て装粧を爲す温
 煖器のカーヘルは多く煉瓦にて築き欣事に併せ供す
 屯田兵の家屋及び農家の土製家屋は成るべく高燥の地を選び一
 尺乃至二尺の深さに地面を掘り四方に九木柱を建て小枝を壁
 と爲し内外より泥土を塗り其厚さ一尺に及ぶ三方又は二方に窓
 を付し屋内の中間には煖器として土製のカーヘルを築く其法
 大槪圓する所の如し彼等の寝具は臥榻敷布圍等もありと雖も我
 國の如き掛け夜具なく何れも毛布一枚乃至二枚を以て充分とせ
 り又清人と露人は多く羊皮を以て製する所の革衣を着する
 なり朝鮮人は寒中他行せざるの習慣と見え革衣を着するを見ず
 蓋し生活の貧乏あるより之を購求するの資力なきもの其多きに
 居るあらん清人の寒中靴は露人の防寒靴と稍々種類を同する
 も其長さば露人は膝を掩ふも清人は短くして足部を包むに過ぎ
 ず製造の材料は牛毛豚毛其他の獸毛を以てせり露人は又羊毛の

露國の東方策にして其利害の關係を有するものは直接に日清韓

日清交戦と露國の關係

三國あり間接には英獨の二國あり而して滿州蒙古地方は直ちに

を費す事を覺悟せざるべからず其間若し嚴寒の時機に際會せば

其土壤を接するを以て兵事上商業上常に一日も利害の關係を絶つべからず朝鮮は其國境と接する僅かに數ヨルストにして兵事商業上に關係なしとするも其國民の溫柔化し易きが爲に新開地移住民として之を誘導するの必要あり我日本は此間に立て優に清韓に勝るの關係を有す抑々現今の西比利亞は夙に世人の知悉する如く元明の世に在ては支那の管轄に屬し殊に清帝は滿州より起りたるを以て東部西比利亞の地は一層深き關係を有せるなり此事に關する著書は數多にして我參謀本部の西比利亞史は最も能く詳説するを以て茲に贅せず現に其沿海洲なる黒龍江以南の地は今より三十餘年前英佛聯合軍の北京を衝きたる際露國が仲裁の勞を取りたる報酬として之を占領し以て國境を朝鮮に接するに至れり抑々邦土を蠶食せられたる後屢々として其土壤を開拓せらるる程舊所領の國民に惡感情を與ふるものはあらず清人の西比利亞

に於ける固より此情を免かる能はざるべし露人も亦常に此情を思はざるにあらざれば清人の西比利亞に入るは最も其喜ばざる所にして故將軍コルフ男爵は清人排斥の議を露皇帝に密奏せし事あり一千八百九十二年以前は外人の拓植自由にして土地所有權を併せ與へたるも其後は是を禁止し以て清人永住の策を防止し彼等をして舊土を戀ふの情を發せざらしむ露の政策大に勤りたりと云ふべし加ふるに東洋第一の良港たる浦潮港を得たるは不毛の地數百里を得たるより寧ろ其利益の大なるものあらん而して猶且つ露人の衷情として彼の西比利亞大鐵道の敷設に於て最も深き者もあらんか最初豫定線路として測量せしものは三線にして其一は亞兒泰山を横斷して蒙古に入り滿州を経て浦潮港に出る者其二は現今敷設せんとして工事に着手する者其三は北方線なり以上三線を南北中央の三線とし露の最も屬望せしは南線なりしも如何せん蒙古滿州地方は悉く清領に屬するを

以て止むなく中央線に決定するに至れり露の勢力を以てせば清國の故障の如きは斷然之を排斥し強制を以て敷設するに難からずと雖も一方英の耽々として雄視するあるを如何せん南方線の利益は四時其工事を繼續して既設の後も互寒の爲めに交通途絶の憂ひなく加ふるに人家稠密の都府多きが爲りに鐵道經濟上偉大の利益あり是れ露人が南方線に屬望する所以にして何時しか機會に乘せんと企圖する者の如し英若し其印度鐵道を西藏に延長し四川省を經て重慶に達せんか露は斷乎とて遂に南方線を敷設するに至らんか露の清に對する感情は將に米國に彷彿たるものあらん假令陸上の貿易に於て磚茶羊毛皮生牛等幾多の取引ありとすも露人の之を捨るは事態尙之より重きものあり朝鮮は小弱國ありと雖も露に對し或る場合に於ては尤も重き關係を有す今試みに英露の衝突あ

りたりとせんか英は印度を本據と爲し支那を指咻し日本を味方に取り露の東方策を破壊せんとするに至らば露の太平洋に出づるの航路は之れを朝鮮に取るの外千島海峽を迂廻するの拙策を取らざるを得ざるべし而して日清其の糧食品の輸入を拒絶せば露は之れを朝鮮に仰ぐの必要あり於是乎露韓の關係は最も親密ならざるを得ざるべし

日露現今の交情は露に於て最も我に勤めざるを得ざる者あり其項目を舉れば第一日本と英國の關係第二地上形の關係第三貿易上日本雜貨の供給第四日本人の潔白にして窃盜其他卑劣の所爲なき事第五日本人は巧智にして工事の經營に必要なる事は是れなり

第四露國の強敵は英國にして事業上英國の妨害を受くる鮮しとせず所謂圖南の政略は常に英人の爲めに妨害せらるゝも英の右に出んとするや久し英人も亦露人の事業を猜策として或は自衛

朝鮮國境に至る地方即ち沿海州沿岸の地は我が日本に面じ朝鮮海峽又は對嶋を以て咽喉を扼し其局東の地を壓して要路を扼するものには實に我日本なり我國若し支那朝鮮と民智の度を同うせば假令緊要一切實の地形を有するも露人は之を懼れざるべきも東洋の主權を一握せんとする我日本は實に彼が東方策上の一大強敵たるの事實あるを以て露人は常に茲に深く慮る所あるは必然の勢あり第三彼我觀易上日本雜貨の彼れが東方に必要なるは今の論を俟たず彼の費用を節し汽船より其の局東の浦蓋港に貨物を運搬するは如何に彼の國の西端より其の局東の浦蓋港に貨物を運搬接するは如何に日本の雜貨の廉且便なるに如かず況んや彼が貧窮にして多數を占むる兵卒及び囚人には最も要用にして卑劣の所爲なき可からざるの威あらん第四日本人の清廉にして卑劣の所爲なきは露人の大に敬慕する所にして實に露國に於ける我國人の名譽なり浦港其他西北利亞の地に在て我國人の進入せしは今より二

の必要より其前路に横はり露國をして敢て暴意を逞うする事能はざらしむればこそ英の東方策は清國と結ぶの必要あると露國の爲に被害最も大なるべく隨て亦た日英の聯合程露人に痛痒を感せしむる者なかるべし何となれば清國は其國大にして人口夥多なりと雖も日本は工業進歩し且つ地形上船舶の通路に故障なく人心は濶泊にして義侠に富み能く道理を解して強に屈せず弱を凌がす又常に清潔を好むの特性あるのみならず世界無比なる万世一系の皇帝を戴き敢て或は人臣不忠の蹟なきは到底清國と日を同うして語るべからず是に於て英人清に結ぶも露人は之を恨みとせざるも日人若し英國と聯合せん乎其露に影響する所果して如何第二地形上日露の關係は最も重要緊切にして彼のカムチャットツカ以西なるオコソツク海は我が千島海峽若くは宗谷海峽より出入するの外巨艦大船の通路亦く而して其黒龍江以西

十餘年前の事あり然るに彼の地方に於ける露清韓三國民の風習は強盜を以て人事の耻辱とせざるものなるに而かも露人は宗教上之を嚴禁するにも拘らず我國人は如何なる賤民奴僕と雖も未だ曾て強盜の爲めに其官廳の所刑を受けたる事なし之れ二十年來我が國民の美事として内外人殊に露人の大いに稱賛する所と爲す又金銀受渡の上にて日本人は最も潔白なる性質を有す露人及び清韓人其他の歐洲人と雖も金銀は實に名譽よりも命よりも之れを重んずるものにして之を以て彼等を御すれば彼等は猫の如く羊の如し獨り我國人は占來金銀を卑み名譽を重んずる風習あるが爲りに貿易上には幾多の損失あるをも往往に感て之を顧みず偏へに私交上の潔白を示せり是れ露人の陰かに感歎措く態はざる所に於て自然國交上の潛勢力とあり百種の關係を維持するに至れり第五日本人の工事經營に必要ある事は今日未だ多く之を實用せるにあらざるも元來露人は大工事に敏活に

して却て小工事に拙に又清韓人は大小共に工事を辨せざるを以て露人に替りて百般の工事を爲す者は實に我日本人あり現今使て露人に替りて其數極めて僅少なれども此等僅少者は既に西北利亞に愛用せられて將來必要の工事者と爲るは決して掩ふべからざる者あり平時の關係に於て既に以上陳ぶるが如きものあり去れば有事の日も亦露人は我と交情を絶つこと能はざるべし假令彼れ未だ局外中立の布告を爲さずと雖も是れ實に英獨に對する政策にして日露の國交上敢て他意あるにあらざるなり加之ならず露人は前段に陳ぶるが如く平日清人を忌み且滿州と地形の關係あるが故に寧ろ我征清の舉を賛成し若し彼の對英國の政策上障礙を來すの憂なからんか彼は翻つて我を援助して清國の不利を謀るや又論を俟たざるなり

農作物飲料水及び畜牧

て年の十一月以後は方に其收穫の際なるを以て豊年には何地も
 糧食潤澤國民鼓腹の時季と爲せり是れ亦嚴寒中商業盛んなるの
 一原因なるべし
 清國本部及び南部に於ける飲料水の不良なるは最も著名なる者
 にして彼の渤海以南を黄海と云ひ上海附近數百里悉く黄色
 を呈するものは皆其の中央及び西北部數千里の内地より一は揚
 子江に一は黄河に或は遼東河と爲りて支那海に注ぐが爲めあり
 此の數百里の海水が悉く黄色を呈する者は如何に三河の大にし
 て隨つて河水の都て泥水ある事を推知するに難からざるべし故に
 内地中央部及び南方の住民は都て泥水を飲料に供す到底中央部
 は我國民等の永住すべきの地にあらざるべし之に反して北
 支那は北京の西北より滿州に接續する山嶽あり東は長白山白頭
 山等幾多の大小山脈連亘して數百里に跨り其他大小溪流の多き
 朝鮮及び我が信州地方と異ならず而して流水皆清淨にして飲料

北支那各地の農作物は第一を高梁米即ち高粱と爲し第二を大豆
 第三を玉蜀黍第四を粟第五を小豆とす其他二三の種類ありと雖
 も夥多の繁殖なく米作は其の南部及び中央部にありて北京以東
 北は皆無と云ふの外なし高粱作の盛んなるは直隸省の東北部及
 び盛京省の南部地方にして盛京省の首府奉天(一名瀋陽)以東北
 は多く玉蜀黍と粟作とを爲す大豆作は盛京省各地の特産物にし
 て直隸省管下も亦幾何の産出なきにあらす清國人の高粱米を
 る所以は其成育の際即ち四五月の候には下葉を取りて牛馬の飼
 料に供し成熱の後には其實を食料となし残莖は燃料若は茸草と爲
 す時に或は牛馬の食料に充てアンペラの材料と爲すもありて
 其他家事百般の用に供す是れ高粱米の實收の儘少なるにも拘は
 らず清人の盛作と極むる所以なり北支那は地味好良ありと雖も
 嚴寒と沼澤多きが爲り我國の如く二回の收穫なく耕作皆一
 作を限りす故に其年に依りて糧食品の豊富と缺乏とあり而し

舉動も少なからざるを以て遂に中央北部の人種に排斥せられ同
 一清國人にして廣東人は外國人視せらるゝに至る中央部の住民
 は其數夥多にして各種の人類雜居し之を區別する甚だ困難なる
 も長江沿岸の住民は多少氣概ありて奸惡と義俠とを混入せりと
 云ふを得べきか山東直隸山西地方は温順にして多少の徳性あり
 北方三省は清明兩朝人の雜居かれども多く山間の住民なるを以
 て無識なれども自然に朴訥質直の風を存せり而して清國人の特
 質とも云ふ可きは南北相通して人智其他百物の上に進化の理あ
 るを解せず怠惰不潔徒だ黄金の生命よりも貴きを知るのみ住民
 の多數は盜賊にして地球上清國の外又他に邦國あるを知らず殊
 に憐れむべきの極あり國中には到處に楊柳を培養し天然木の
 外人造木を以て立木の八分を占む然れども薪材缺乏の爲めに草
 根を焚料に供するを以て自然生の雜草は殆んど根絶するに至れ
 り是れ清國が數百千里の土壤何れの處に至るも灰中を歩行する

變じて秃山と化せり住民の性質は何れも順朴の風あり故に其中
 央部乃至南部の如く麻弱若くは狡獪ならずと雖も一旦險を犯し
 難を排して蕃地に闖入せしものなれば幾分の勇氣あるが如し彼
 の吉林省の管下長白山麓に割居する馬賊韓顯宗一味の黨の如き
 は明未人の集合にして内外の旅客を苦むる實に少しとせず三省
 中住民の總數は固と戸籍法の存するなきが爲り之を知るに由あ
 きも盛京省二百萬乃至二百五十萬吉林黑龍の二省を合せて二百
 五十萬乃至三百萬内外とせば大なる遠算もあらざるべし(或る外
 人の説には三省の全体を以て三百萬と云ひ清國通なる我が某氏
 は七百萬と云ひしも兩説共に之を確信する能はず)
 抑も清人を大別せば三種と爲すべし一南部廣東福州地方二中央
 部三滿州人にして南部人民は常に歐米又は其他の諸外國に行商
 出稼するを以て自然に智識を開發して中央部及び北部人の如く
 質朴ならず農工商其他經濟上の運轉に敏活なれば随つて不正の

涙するに當て反賊の所在の地方に無稽の流言を放たしむるに在り
 曰く某將軍幾萬の精兵を統御して已に都を出づ或は將軍の率ゆ
 る精兵は何々の戦器を携帶せり將軍は戦地の経歴幾回にして其
 を天に敵なしと斯の如き虚喝の流言を爲さしめ以て敵の強弱
 を試み其敵尙ほ退散せざれば幾百千の騎歩兵を縱横無事に馳驅
 せしめ數萬の軍兵近づく既相迫るの勢を擬す是に於てか其反賊
 も多し此擬勢に恐れ大抵は潰走し一時平穩に歸するに至る若
 し將た否らざるも數十里乃至百里の地に奔竄して京軍の鋒鏑
 を避く京軍の將は之を中央政府的に報告するに又極めて架空の
 の文章を以て所謂三國誌的戦況を羅列し以て大戦快捷の功を
 誇る是れ清國從來の討賊戦法にして其擬や到底我國人の夢想
 も及ばざる所あり彼の長髮賊は清國近時の大亂にして交戦十七
 年の長きに涉り會國藩の弟會國詮は賊と對陣する三年間の對陣に砲
 及びたりとて清人は頗る其勇を誇ると雖も三年間の對陣に砲

が如きの觀ある所以なり
 清人が戦時の習慣として世に傳ふる所を聞くに自國內に於ては
 事實の戦争を爲す甚だ稀にして例せんは今某所に反賊あり地方
 官若くは中央政府の命令に抗し官署を焼き民財を奪ふものあり
 とせんか地方官は先づ之を中央政府に報告し其指揮を乞ふ而し
 て其報ずる所の事實は多く架空誇大の事を以てし二三百の賊徒
 も四五千と稱し些少の被害も傾世の恐れあり中央政府も亦甚だ
 小棒大に且つ其急を告ぐる者日に數回に及ぶ中央政府も亦甚だ
 之を驚かす急報の至る幾十回に及ぶ容易に出兵を許可せず而
 して此間に反賊は日に勢力を増加し甲地より乙地に轉じ漸次其
 區域を擴張して益々暴威を逞うするも地方官は敢て之を制御せ
 ず斯くの如きもの數月或は數年に涉り遂に討賊の命あり將を遣
 で總督と爲さしめ茲に初めて兵を集め戦術を講ず其戦地に向ふ
 や直ちに反賊の巢窟を衝き平定を期するにあらすして先づ兵を

(一四) 慣習ひ及質性の人清

相互の間に於けるも其占領を免れたり云はば兩家各人共に之を信せず故に清國と交戦を爲す者は常に此心を以て彼を處するの必要あり彼の英佛聯合軍の北京を占領するや又此慣習に據りて彼の遠明國の寶物の如き亦悉く掠奪し一も殘す所なかりし物と近時日清の交戦中清人較も悉く掠奪し一も殘す所なかりし物と人を掠奪する所以の者亦此慣習ありが爲めなり

情事清北 (〇四)

丸を交へたる事なく縦し假に數回の砲戦を爲せしとするも元と是れ彈丸の達せざる地位より砲撃するものなれば敵味方に其一兵をも殺傷する事あらざりしなり近時李鴻章幕下の兵は西人の手に依りて西式に訓練せられたれば幾分の舊慣を破り又英佛の聯合軍若くは福州に於ける清佛戦争の爲め此慣習を破るの端緒を開きたる者ありとするも其は當局者の一部に止まり多敷清人の未だ昏くとして舊慣中に睡生夢死するものと云ふべし又清國の戦鬪に一奇觀あり反賊若しくは政府軍にして一方の領地即ち敵の管下なる一都府或は一村落を占領せんか三晝夜は強盜勝手次第に過ぐれば民財を犯すを禁ず去れば清而して三日を過ぐれば新政を發布し民財を犯すを禁ず去れば清人は斯の如き奇法を以て古來戦時の習慣と爲し舉國之を怪まらず故に今若し如何に義戦と稱して一片の民財をも犯すも他の方の住民は決して之を信せず其甚しきに至ては相接する兩家

るに緊足の風あるが故に之を急變せしむるは情に於て忍びざるも之を放棄せるあり然るに明末人は意へらく是れ清朝の婦人を化し得ずと今に於て猶此諺あり又男子は曰く生時清に服するも死すれば即ち明に歸ると道は清人の理法依然として明の舊禮を用ふるが爲めなり清人若し我國人の洋装を見るや日本は英國の爲めに國土を征服せられたるより遂に其國服を代ふるに至れり我は英佛の聯合軍に當るも未だ西人には敗北せざるなり故に彼等は如何に城下の盟を爲し邦土を割かれ償金を徴せられに彼等は軍艦を奪はれ又は之を擧げせられ砲臺破壊れて衛兵壓殺せらるるに至るも猶且つ敗軍と爲さず其身敗死するも未だ以て敗を云はざるなり則ち生時日本に敗するも死すれば則ち清に歸ると嗟呼今後我軍の之を實見する將に近きにあるべし元來清人が自國風を重じ外國人を蔑視するは一般の風習なりと

公使館は元滿州將軍の邸宅なりしも或る時其使役する下婢の主人に含む所ありて遂に井に投じたりしが爾來其怨靈祟りを爲すと稱し將軍自から其居を轉じて舊邸を捨てたりと而して尤も抱腹に堪へざるものは一旦化物屋敷の名を得たるが爲め舊邸の建造物は一切之を新邸に移すを欲せずとて皆其儘に拋棄せりと云ふ事情既に斯くの如くなれば華美を極めたる將軍の邸宅も此妖言の爲めに數年間之を購ふものも亦く所謂建ち腐れの有様となりしを以て我國は廉價に之を購入するを得て公使館に充てたりと其眞に笑ふに堪へたるものあり清國は土地の廣く民衆多きが爲め國民一般擧げて負け惜み魂性に富む事は眞に驚くべきものあり其諺に曰く清朝強ど雖も明の婦人を化すること能はずと蓋し其意は會て清祖明に代り四百餘州を統御するや男子は悉く滿州の風俗に倣はしめ髪を辮にし服を短にし其袖を筒にせり然れども明の婦人は元と臙弱にして加

奉天府は滿州盛京省の首府にして又實に吉林黒龍江二省の首府と云ふも可なるべし滿州將軍は常に此地にありて三省の軍隊を統轄す地勢は南東北の三方遙に連山を望み西方數十里は遼東河に沿ふ東方に距る四里を隔て、天柱山聳立し其の眺望最も佳絶なり此地は清の皇祖の居城にして戸數大約三萬内外に過ぎざるべし(稱して十萬と云ふ)内城あり外廓あり外廓は元と土塼なりし爲め今は悉く破壊して唯數個の小門を存するのみ内城は八個の城門を構へ周圍は清里九里内部甚だ廣濶ならず中央に皇祖の廟を設け諸官衙之を圍繞せり而して府内衙門の多きは實に我舊幕

より自然自衛の精神を發揮し今日の如く清人を尊崇せざるに至りしならん去れば今後朝鮮國自衛の兵どして新募するものは先づ第一に威鏡道に之を募り朝鮮國民の獨立心を誘起する即ち一の手段なるべし

奉天府附近の形勢

雖もしかも朝鮮人を見恰も奴僕の如き有様あるは予の滿州旅行中常に憤慨措く能はざる所なりし清人の朝鮮人を呼ぶ其官民の區別なく都て高麗々々として稱し又朝鮮の最敬禮は双手を地に垂れ叩頭するを以て常とす我國人に接するには公使領事の外此禮を施さざるも清人は其身卑官と雖も韓人をして最敬禮を施すにあらざれば之を許さざるなり其最敬禮を受けたる清人は敢て之に答禮を爲さず傲然横に據り唯だ下瞰する耳清人は自國を以て大國と云ひ而して韓人は其自國を小國と云ふ縁鴨江の沿岸韓滿兩國の住民及び豆滿江附近より浦鹽邊に至る一圓の地は普通清韓の國名を變稱し大國小國(韓人は大國小國と云ふ)を以て代名詞となせり而して慣習の久しき韓人敢て又之を怪まざるに至る平安道の住民は朝鮮入道中の驍勇を以て誇る者なりと雖も清人に對する時は恰も奴僕の如く又犬猫の如し唯だ威鏡道北部の民は普通の待遇を爲せり蓋し威鏡道は彼の馬賊の侵害を被る屢くなる

(七四) 勢形の近附府天奉

山^の豪^族を^征服^して^十萬^の壯^丁を^して^一時^に快^哉を^連呼^せし^めた^る
 の^の大^皇祖^の興^京に^在る^のに^あら^ざり^しも^南部^十八^省を^併吞^せ
 め^の西^方奉^天府^を瞰^下す^る處^其風^光媚^景趣^言ふ^べか^らず^始
 き^あり^西方^奉天^府を^瞰下^する^處其^風光^媚景^趣言^ふべ^から^ず始^め
 と^して^之を^繞る^而し^て水^を隔^てて^遠に^群山^層峯^の起^伏波^瀾の^如
 し^又他^の兀^ら山^嶺に^似す^東南^の山^麓に^は渾^河の^水清^く一^帯沼^々
 天^柱山^は盛^京省^中に^冠たる^勝區^にし^て全^山嶺^とし^て老^樹茂^生
 ら^しむ^部巡^捕廳^奉天^府等^の諸^衙門^城中^に發^立し^て充^分北^清雄^鎮の^觀あ
 一^國首^府の^体裁^を存^し將^軍衙^門と^始め^左右^兵將^衙門^兵部^刑部^工
 三^にし^て足^らざ^りし^流石^は南^部十^八省^を征^略し^て清^朝を^創立^し
 た^る愛^親覺^羅氏^の成^業地^なり^一括^して^當府^を評^下せ^ば嚴^然た^る
 し^が滿^州に^入り^て始^めて^清人^猶は^未だ^生氣^あり^と思^意せ^る者^二

情 事 清 北 (六四)

一^位を^占め^多く^の商^店は^毛皮^類雜^穀物^等に^して^藥品^毛布^之に^次
 石^油洋^鐵の^如き^外來^品の^需用^も亦^尠な^から^ず元^來滿^州各^地の^商
 業^は冬^期四^ヶ月^間即^ち十^一月^より^翌年^二月^を以^て其^盛時^とす^此
 れ^道路^橋梁^の不^完全^なる^と河^川沼^澤の^多き^が爲^めに^春夏^秋は^最
 も^運送^に不^便を^極む^るに^由る^然る^に冬^期四^ヶ月^間は^河川^沼澤^都
 て^氷結^する^を以^て平^日の^數十^里も^氷上^を行^けば^纒か^に數^里に^過
 ぎ^ず是^に於^てか^八方^の貨^物は^一に^皆な^奉天^牛莊^等に^集り^物價^頓
 に^下落^する^を以^て此^期に^乘じ^て中^央支^那の^商人^は滿^州に^入込^み
 偏^へに^商業^に従^事す^則ち^冬期^の盛^んなる^理由^にし^て實^に滿^州の^活
 一^異事^と云^ふべ^し住^民は^概して^正實^にし^て且^つ清^國中^に在^るて^活
 激^の氣^概は^稍や^滿州^に存^在す^るあ^らん^か予^の中^央支^那及^び北^京
 地^方に^漫遊^する^や清^國既^に死^せり^とは^屢々^之を^口に^する^所な^り

所東山海關に起りて西嘉谷關に達し其全長五千餘里彼の秦燕趙三代數百年の築造に係る而して今や更に幾多の星霜を閱して彼の起工地たる山海關附近の破壊するに至りたるは素より怪むに足らずと雖も明に我國人の彼土に在りて長城は巍然として今猶存在せりと説くに至つては轉た喫驚に堪へざるあり(晩年の築造に係る入達領以西嘉谷關附近に至つては未だ其眞況を踏査せず)長城の軍事に要なきは夫れ斯の如し防備も亦平時の置兵の如きは固より老衰事に辨せず徒だ東門の裡に駐在して旅人の驗證諸税の徴收に従事せるのみ地は海岸を距る數丁にして其城壁は海に在りみ沿岸數十里灣形を爲さず彼つ遠淺なれば巨船大船を出入せしむる能はず關の以東錦州に至るの地勢東北西方面は山脈連亘して直隸省より盛京省に渉り南東面は渤海に莅む海岸一帶小峯起伏し恰かも我北海道に東岸を行くに似たり關西白河口に至るの沿岸又適當の港灣なく唯深河口のみ幾多の船舶を出入せしむる

を得るの便あるのみ而して昨年中開平の鐵道を此地に到達せしめたるを以て天津太沽に至るには更に幾層の便利を開けり想ふに是れより兵備上商業上には偉大の變化を來し今後の長城と港灣は實に之に依つて代用せらるゝなるべし關より北京に出るの土地は悉く永平府の管下に屬し一州六縣あり州は灤州府南清里四十里(灤州府)灤州の東九十里(府)西四十里(撫寧府)東八十里(昌黎府)の東南八十里(樂亭)灤州の東九十里(及臨榆)即山海關府東六十里而して往時此地方は西貢の冀州營州にして商の世には孤竹國と云ひ春秋には盧龍郡と改め北魏には北平郡と稱し金の南京元の永平路明代に至りて府を置き清朝之を因襲せり白河(一名北江と云ふ)の東岸一体の地所謂沼澤數十百里に渉り河水氾濫行通最も不便を極む産物は高粱(高粱)を第一とし大豆之に次ぎ又海岸は多く食鹽を産す葡萄葱等の産出も亦少からずと云ふ

北京城の起原は遠く唐堯の世に在り虞舜之に次ぎ夏殷に傳へ來は二郡となし漢は燕國と稱し遂に至りて都を建て宗金元に及び元の世祖も亦茲に都を定め明の永樂七年に築城の舉あり現今存在するものは即ち此城なり内城の周圍は清里四十里城門九個其南面ある正門を正陽門と云ひ正門の左を崇文門右を宣武門と云ふ東面に朝陽東直二門あり西面又阜城西直の二門を備ふ北面にも二門あり其東を安定門西を德勝門と名く城壁の高さ四十尺壁上の幅員は六十四尺にして其下は漸次之を増幅す築造法は内部に土塊を盛り外面は煉瓦を被へり清人の敵を防ぐ常に此壁上にありて防禦せりと聞くも彼の英佛聯合軍の此城を略取るや實に一九を用ひざりしなり壁より其外面を下瞰するに之れに準する又甚だ難からざるを覺ゆ聯合英軍の攻撃策は先づ城壁の下を砲撃し地上十五尺の高さに至る迄洞孔を穿ち此より兵を城内

に入るの工風ありしと云ふも道は實際に舉行するに至らずして止みたりと聞く
 北京の常備兵は平時に於て左の數ありと雖も道は是れ帳簿上の記號に止まり實用を爲すものは幾かに數千に過ぎざるべし

一	親軍營	二千九百人
二	前鋒營	一千九百人
三	騎驍營	三萬九千七百人
四	步軍營	一萬九千九百人
五	護軍營	一萬三千六百人
六	内外火器營	六千五百人
七	健銳營	三千三百人
八	圓明園護軍	四千五百人
九	内府三旗虎槍營	二千八百人
十	内府三旗前鋒營	五千八百人

- 十一 南園守衛官兵 一百人
- 十二 五城巡捕營 一萬〇四百人
- 十三 神機營 一萬四千人

(但し將兵合計の數なり)
 以上總數十一萬一千九百人、之を禁旅八旗と云ふ而して神機營を除くの外は、都て清國古代相傳の軍法軍器に由るものにして法は孫吳に基き器は弓槍火繩銃等なれども、其實際に至ては將に孫吳の實なく兵に銃操劍法の技なきは言を俟たず而して彼等も亦之を以て自ら甘する所なり
 神機營は八旗中步騎砲三兵の壯丁を抽き更に歩兵十二隊騎兵十隊砲兵二隊を以て組織し内九隊を洋式に訓練せしめれば聊か實用を爲すべしと雖も清人の特性として實際の闘争を好まざるが故に戰時に於て用を爲すや否やは甚だ疑ふべき所のものとす
 英佛聯合軍は今より三十四年前にして當時は神機營の組織あか

りしも之に代るに滿蒙二州の兵あり彼の蒙古王僧格林沁が率ひたる驍騎兵の標悍殘忍強敵を見て敢て怖れざるが如きは到底現今の清人が夢想だに及ばざる所なり然れども尙ほ太沽の一戰に其膽を奪はれ天津を捨て通州を捨て儘かに城東に宿營して敵兵を迎へたるも戰鬪數時ならずして忽焉潰走したるは以て清兵の實力なきを知るに餘りあり
 北京は廣漠たる大原野の北端に位し其南山東河南山西安徽等の諸省に至る數百千里の間は一の山嶽なく東方又渤海の沿岸山海關に達する六十餘里の間は都ての廣原にして西方に我五里西山あり其山脈遠く西北の方面に連亘して滿蒙に境す西山は我日光の如く幾多の佛閣あり又彼の圓明園萬壽山等清皇の離宮ありて清人は盛んに其壯宏を誇稱すと雖も我日光に比すれば唯夫れ廢寺舊刹の古城なるのみ城東の朝陽門を出で通州に至るの間は河川水澤多くして僅かに一條の大道あるも決して大軍の行路に適

注々を以て清人此處を以て最も幽遠の境なりと稱せり
 皇大帝の闕の地と稱す園中は林樹森々として盛溝河の下流之れ
 を距る南二里餘苑中漁民千六百戸を置き以て之を守らしむ是れ
 を慈加しひ郊外の附近には南苑と稱する清帝の御園あり永定門
 も慈類絶して轉た行人をして清人の無智無能百事に冷淡なる
 名勝蹟は唯其名を存するのみにして實地に之を探ぐれば何れ
 安寺、憫中寺、芥子園、梁家園等の大庭巨刹少なからずと雖も清國の
 ら耕して以て民に視すと云ふ蓋し其式を行ふのみ其外太歳殿聖
 社安寧を祈る所に於て其西側を地壇と稱す同じく皇帝大臣自か
 に接する正陽大街の東側に天壇と云へるあり是れ清皇國士の福
 猪子口と名く北城中に於て最も不潔を極むる所とす又永定門
 城址を觀るの概あり廣渠廣寧二門の通衢正陽大街を貫く處之を
 部分にして漸く南すれば破屋廢樓四方に散點し滿目荒涼宛然古
 れる繁榮を極むる者の如し然れども其殷富の地は纔に北面の少

顔を難查を極む總て内城に接近せる外城の市街は却て内城に勝
 る地は内外城の居民日夜群集して正陽橋あり橋畔の東西月堵と名く
 街と爲す特に正陽門に接して正陽橋あり橋畔の東西月堵と名く
 角に於て西便門東北角は東便門と云へる永定門は正陽大街
 と云ふ而して其東面するものは廣渠門西面するは廣寧門又西北
 二十尺城門は七個正南を永定門と云ひ其左を左安門右を右安門
 外城は内城の南面を圍繞する外廓にして周圍四十里城壁の高さ
 水等の如きも亦良好なるを知るべし
 爲すに難しとせず又城北の地は既に英兵の宿營せしを以て飲料
 氾濫稀なるを以て軍隊の馳驅最も便なり而して地質早燥野營の
 と爲すに適當せり道路は屈曲して頗る困難なれども水澤河川の
 南附近は古樹老木蒼鬱として寺院頗る夥多なれば行軍宿營の地
 せす併し水利を以てせば輻重の運搬には其便なしとせず城の西

北京天津間は我京漢間の如き關係ありて其行通も甚だ頻繁なり
道路は數條に岐れて行程二十五里天津を出づるは一途なりと雖
も北京近傍に至りて其外城の永定門に至る者左安門及び廣梁門
に至る者の數條ありて各一里乃至二里の差あり又通州より内城
の朝陽門に至る陸路あり是れ水路に接近せる通路なるを以て數
條中最近の迂回と爲す水路は所謂白河の便を假るものにして北
京より下流二日間にして天津に達するを得るも北上即ち天津よ
り北京に向ふは四日乃至五日を費す故に舟行は流を下るの乗客
ありても北上の乗客は多く馬車及び驢馬を以てするを
常とす而して特に旅客の注意すべきは此間の住民なり彼等は日
々内外人に接して旅人の目的に生活するを以て狡猾殊に甚だし
く又北京人は支那全土第一の良民にして性質最も温良なりと稱
せらるるにも拘はらず一步城外の地即ち天津街道に出づれば忽
ち惡奸諸方に徘徊して外人の至るれば法外の金圓を請求

せり一例を擧ぐれば現に他の地方に於ては内外人の宿泊料(我木
賃宿に云ふ屋根代と一般なり)一泊五厘より一錢五六厘を以て普
通とするも北京街道は五六錢或は十錢を食り又馬車代の如きも
清人は二十五里六七十錢より一圓二三十錢に過ぎざるに外人に
は安きも四圓乃至八九圓を請求す其他百般の所爲頗る不信切な
り

九連城及び義州府

九連城は滿州中盛京省の内安東縣の管下にあり則ち鴨綠江の西
岸朝鮮國義州府に相對する一小村落とす海岸を距る五里朝鮮京
城より清國北京に至る要道と爲す而して其本道は湯山城故鳳凰
城に取り牛莊城に出で高平閭陽を経て金州府に至るあり又黃海
の沿岸安東縣沙河金州(旅順口)の近傍復州益平等を経て營口に出
る時は四十里餘の迂路となるも本道の如く山路を經るの難なし
而して清韓兩國の陸上貿易地となり戸數六七十戸官廳は一の税

防戦するは牙山平壤より一層の奮闘を見るべし然れども此地の地勢は彼に不利にして我に利するや又疑ふべからず九連城は既に陳ふが如く後背山を負ひ前面に鴨綠江を扣へ而して南西の地數里直に海岸に接し雖も現今の如き砲丸二三哩の遠きに達する戦闘には甚だ防禦の至難なるを免かれず我兵若し朝鮮領なる鴨綠江の河岸小山の嶺に砲台を構へ以て敵壘を砲撃せんか九連城は我砲的にして到底之を衝るの道あり軍隊を上陸せしめんか彼は連海若くは旅順口を占領し海岸より軍隊を上陸せしめんか彼は唯鳳凰城に退くか又は崎嶇たる山路を攀躋して牛莊に走るの外なし鴨綠江の上流楚山附近に到る江の兩岸は峯樹重疊人烟稀少なれば容易に軍隊を進むる能はず幾次かに敗兵の此地に遁るの外又防備を設くるの餘地なく加ふるに産出の穀物は粟小麦玉蜀黍西天穀等些少の者なれば決して永く清軍防禦の道なき哉知るべきなり

關を設くるのみ鴨綠江の中間中洲の地に出張所を設くるは水路朝鮮領に接するが爲めなるべし平時の貿易は格別盛んなりと云ふにあらざる然れども清國官吏と義州府との交渉事件は常に頻繁を極むるを以て官吏の往復は始終絶る時なし鴨綠江は水勢汽船を浮ぶる能はず蓋し我淀川に用ふる川蒸氣を以てせば海岸より義州府に至る如きは易々たるべし安東縣に至るの方面は平地多きも西北西の地即ち江の北西岸より鳳凰城に通ずる方面は小山累々として遙に奉天府に連り義州府以南も亦山道に屬す而かも其海岸に當り一二方面に突出する小山は小國と雖も自から清領を壓するの形勢を示すが如し

今や平壤の清兵を討滅したれば遁るを追ふて滿州に入らんとせば第三の交戦場は即ち義州及び九連城の地たるや疑ふ可からず何となれば清人如何に臆病なればとて外敵其境に入らんか死力を盡して之を防止するは當然の事なればなり去れば清人の茲に

の廣野を歴す城北は嶺岸數丈甚だ要害の地形なり戸數一萬商業亦た盛んあり平安道の物産は煙草を以て第一とし第二を大豆第三を米とす煙草の産出は概算一年に五千駄内外なりと云ふ大豆は平安道全体の産出高七十萬俵に登ぼり米は二十六萬三千餘石に過ぎず而して砂金の産出最も夥しく實に本道は全土皆砂金山と稱するも煙言にあらす其數已に九十餘ヶ所に及ぶと云ふ又織花養蠶業も八道中唯一の産出地と稱せり住民は韓國中最も驍勇ありと自稱するも此一點は未だ威鏡道に及ばざるべし然れども概して義氣に富み清人西洋人の倨傲を惡み却て日本人を尊敬するの風あり日本人に對するの言語は多く「ヤングバン」(役人と云ふ意)と云ひ支那人及び洋裝を爲したる者は「サグノム」(下人)と嘲る我國人を尊敬する所以は古來幾多の因縁あるが爲あらん現に古老の説に據れば平壤の近傍には往時多く日本人種後裔の大村落ありて今は肥前屋と稱する者二三戸に止まれりと云ふ又小西攝津

義州府城は戸數三千甚だ殷富ならずと雖も人氣は穩柔にして他に從ふの風あり蓋し常に清人の壓抑を被るが爲なり而して其鴨綠江岸に望む城壁は遠く九連城を眼下に瞰視し敵の行動は一目の許に之を観察するを得て眺望尤も可なり特に我軍の注意すべきは糧食品の一事にして義州附近は群山連峯相接し田畑頗る稀なるを以て隨て米穀の産出なく且つ運搬最も不便なれば之を地方に徵發せんとするも其望みを達すること能はざるべし故に我軍は速に清領安東縣地方を占領することに能はざるべしに接して海運の便を利用すると共に又其地方は人家稠密なれば穀物の徵發に支障なかるべきなり

朝鮮平城の形勢

朝鮮國平安道の首府平壤は元朝鮮國の創業者たる箕氏の都城にして後百濟王も亦茲に都せりと云ふ地は大同江に臨み尖頭小山東南の方傾斜の地に城壁を築き所謂南面して江東南數千百町歩

口より平安道沿岸は海淺うして航海極て困難なり因に云ふ本鎮
 三ヶ所に過ぎずして鐵島以下の如きは商業隆盛の地に非ず又海
 係を有す然れども其沿岸の商業は何れも江の上流にある前記の關
 要するに大同江は戰寧、黃州、平壤等の地方に向て運搬上緊切の關
 くにの湖は河幅五十間より四十間に達し兩岸絶えて岩石なく底深
 の湖は事なきを以て其詳細を知るを得ざれども鐵島の上流四
 稍や小なるは石湖亭を以て終りとす鐵島より載寧江は未だ汽船
 ず故に大同江は平壤を以て水利の盡頭とし汽船の大なるは鐵島
 壤より上は河幅小にして貨物の運搬に甚しき便利とは云ふ可ら
 巨船を容るべし平壤の前岸には常に五六百石積の船を繋ぐ平
 海里にして平壤に近き處二ヶ所の淺瀬ありと雖も滿潮の時には
 井海里にして此間は江幅尙濶く水深し石湖亭より平壤迄は十二
 ンガ、石湖亭、萬頂台等沿岸幾多の諸港あり鐵島の上石湖亭迄は

守の墳墓其他の墓所も少からずと聞けば平壤附近の人種は日韓
 兩國人の雜婚より以て今日に至りたる者なるを知に足ん前面の
 大、同江は豫て開港の説あり江は其源を寧邊に發し徳川、般山、順川
 を經る一水と黃海、江原、咸鏡、平安諸道分界地方より來る諸水と合
 せ江東に到りて漸く巨流となり南流平壤を過ぎ普通江を合せて
 鐵島(開港豫定地)の一に至り又載寧江を合して西流海に入る長さ
 百五十里入道大江中最も大なるものなり水運は平壤、載寧、黃州等
 の盛況を謀るに於て最も與つて力あり黃海の半道及び平安道の
 大部分に於ける商業は全く此江に據る者と云ふべし海口より鐵
 島迄は二十三海里にして其南岸安岳地方には斗愛浦、浮石浦、致石
 浦、福頭浦等あり長連地方には大津の浦口あり又北岸には三和地
 方に贈南、大井、塔山の諸浦あり鐵島も其一浦口にして南岸に外
 嚴浦(開港豫定)の二あり海口より鐵島迄は江幅濶く水深くして巨
 船を容るべし鐵島より平壤迄は四十二海里にして其間腰浦、ヲガ

しが某氏の異同なしと答ふるものは畢竟答辯の繁を厭ふて之
 を避けたるあるべし若し否らざれば餘り迂濶の答へと謂ふべ
 し退いて之を思ふ彼の官邊に在る人々の旅行にはボーイあり
 通辯あり加ふるに行途の資に窮せず到處宿泊の際には米食を
 命じ鶏肉を徴し官署に至れば儀式的の應對を爲す嗟是れ清韓
 何れの地も異りなき所以なり徒た夫れ異なる所のものは眼に觸
 る山川草木のみ別に異同なかるべしと
 夫れ斯くの如くにして事物の真相を見んと欲するも儀式的飾言
 を聞き架空的假裝を知るの外他に其益あるを知らざるなり然り
 と雖も其儀式的調査を避け専ら實事のみを知らんとするも亦た
 最も至難の業にして其之れを窮めんとする清國其物既に虚文虚
 飾の固休にして決して容易にあらざるが清國陸海軍の現況
 を序し併せて其現在表を視さんとするに當り特に豫め讀者に告
 ぐる所以なり

の北西距離我十八里の處に安州城あり戸數五千餘の一都府なり
 城北に大河を控へ恰かも平壤を東南より見ると同一の觀あり
 清國陸海軍制
 左に掲ぐるものは清國陸海軍の現狀なり我國に於て之を記述す
 るもの少なからず然れども清國に於ける千百の事物は唯外見を
 以て其實を類推するは大なる誤解を招くの虞なきにあらす既に
 予の軍事上の觀察として本編の冒頭に之を序述せしを以て讀
 者は必ず其梗概を知り得られたるべしと雖も更に左の事實に
 依り我國人の清國陸海軍調査の手段を推考せらるゝに於ては蓋
 し思ひ半に過ぐるものあらん
 予一日或る貴紳と會見す座に清韓内地を巡回して新たに歸朝
 せる某氏亦來り會す是に於て一客歸來の人に問ふて曰く支那
 の内地と朝鮮の内地と食物の異同は如何と歸來の人は答たふら
 く別に異同ある事なし云々此時予は頗る奇異の思を爲したり

北清事情 (〇七)

新疆駐防 一五、四九四
 合 計 二六一、五五四
 外に米穀三百〇二萬二千二百六十二石
 同 五六三二、八五二

此の八旗兵の所在地を類別せば
 新軍營、前鋒營、護軍營、驍騎營、健銳營、火器營、神機營、步軍營、圓明園
 護軍營、虎槍營、內務府三旗營、內務府驍營、槍砲藤牌營、八旗練兵順
 天府練兵
 以上北京城及び其附近
 畿輔駐防は 寶坻五十三人、槍州五百二十四人、東安五十三人、采
 育五十三人、保定五百七十三人、固安五十三人、良鄉五十三人、雄縣
 五十三人
 密雲二千五百五十三人、昌平五十四人、玉田百〇五人、三河百〇五人
 古北口二百人、順義五十四人、山海關一千二百二十七人、永平百〇五
 人、冷口百五十五人、羅文峪百〇五人、喜峯口二百〇七人、張家口一
 千百七十八人、獨石口一百二十五人、千家店五十餘人、熱河喀喇河屯
 二ヶ所二千三百二十六人、張家口外一帶地方に在りて平素游牧
 するもの八千五百餘人

清國陸海軍制 (一七)

盛京駐防は奉天府及び其他の府廳縣に散在す
 吉林駐防は吉林其他各部に散在す
 黑龍江駐防は齊々哈爾其他各部に駐在す
 江南駐防は江寧京口の二所に駐在す
 湖江駐防は刑州城に駐在す
 福建駐防は福州城に駐在す
 浙江駐防は杭州乍浦の二城に駐在す
 陝西駐防は西安城に駐在す
 山西駐防は太原歸化綏遠等の各城に駐在す
 廣東駐防は廣州城に駐在す
 四川駐防は成都城に駐在す
 甘肅駐防は寧夏涼州莊浪の三城に駐在す
 山東駐防は青州德州の二城に駐在す
 新疆駐防は伊犁其他露領接近に駐在す

(三七) 清國陸海軍制

爲すに過ぎず蓋なし斯の如きは清國普通の習慣となつて中央政
 只其名義をのみ存し以て中央政府より相當の費目を徴し私財と
 る耳ならず其各省の提督及び將官等が私利を營むの具として
 緑旗を置くに難も別に之を擴張せるを聞かず之を擴張せざ
 國藩は別に郷勇を募集して賊兵を討滅するに至れり爾來各省中
 の頭は八旗緑旗共に唯名のみを存し更に實用に適せざるより會
 者又時に一盛一衰あり而して今より二十餘年前彼の長髮賊戰亂
 緑旗兵は清祖明を平定するの後明末の殘黨を募集して組織せる

湖北省	一八、九二〇	二八〇、一八七	鳥槍	一八二七四
湖南省	二八、五三二	四〇四、四三六	鳥槍	二二七四九
甘肅省	二七、〇四八	四五七、九〇〇	鳥槍	三三六四七
陝西省	二九、一五一	三八八、二五四	鳥槍	二八三五七
雲南省	三五、二一一	五一九、七七三	鳥槍	二八五七三
貴州省	三四、〇五〇	四五六、九四五	鳥槍	三二四八九
計	五〇六、五九一	七五四、九八五	計	四四七三八九

外に長槍劈山砲弓箭

北清事精 (二七)

其他陵寢旗人一千四百人、は盛京省中の興京、天柱山、承德縣、隆業山
 及び直隸省の遵化州(東陵)易州(西陵)等の各皇祖の陵に永住駐防せ

直隸省	五二、二五〇	一〇七八、九一四	馬槍四一四二長槍劈 山砲弓箭
山西省	二三、〇四五	二七一、五二七	鳥槍 二〇〇〇
山東省	一九、七八七	二五九、一八三	鳥槍 一七八九四
河南省	一五、六八二	二〇一、九三三	鳥槍 一三五七三
安徽省	二八、六〇一	五〇三、一五六	鳥槍 三三九三〇
江西省	一〇、三四八	二二〇、九七〇	鳥槍 一一二七五
福建省	一一、〇二六	一一一、五七〇	鳥槍 一一八〇〇
浙江省	三三、五三五	五九七、三一五	鳥槍 二六八五四
廣東省	二四、八七〇	四二〇、七〇四	鳥槍 二二五七六
廣西省	四九、六三八	六六九、六五三	鳥槍 四四七六〇
四川省	一一、七二四	一七〇、九六五	鳥槍 一二四〇〇
計	五三、一三八	四七七、六〇一	鳥槍 二七八三五

(七七) 清國陸海軍制

陝西省 步兵 騎兵	廣西省 步兵	湖北省 步兵 騎兵	四川省 步兵	臺灣省 步兵	福建省 步兵	廣東省 步兵	浙江省 步兵	江蘇省 步兵	河南省 步兵 騎兵
四八五 二二五	三、〇〇〇	八、〇四〇 九一三	六、〇六〇	二、二〇〇	四、二六五	三、〇〇〇	三、二二二	二〇、四三六	三、五〇〇 七八一
一七、四八四 三、〇三六	三三〇、三二二	五二五、二二〇 七、八六九	五二二、五八〇	二五二、五三二	二九二、〇四四	一九七、一九六	二二五、〇九六	一四一九、三四八	一八三、二七六 八四、八八八
洋鎗 信砲 洋馬鎗	洋鎗 信砲	洋鎗 信砲 洋馬鎗	洋鎗 信砲	洋鎗 信砲	洋鎗 信砲	洋鎗 信砲	洋鎗 信砲	洋鎗 信砲	洋鎗 信砲 洋馬鎗
三八〇 一五〇六	二五八〇 二四〇	六五六〇 九六〇 八二〇〇	四九二〇 七三〇	一六四〇 二四〇	三四二〇 五四〇	一三〇七 三六	二〇〇〇 五四	二七〇五 二六二	二八七〇 四三〇 七四〇

(六七) 北清事

山西省	河南省	陝西省	雲南省	貴州省	計	直隸省 步兵 砲兵 騎兵	山東省 步兵 騎兵
七、三九九	四、七二七	一〇、六四一	一九、五九一	一三、〇三四	二三八、二八二	一九、八〇七 二、二七二 一、九七七	六、〇〇〇 六一五
三九八、七四八	二二三、〇八四	六〇七、九二〇	一二三四、三二二	一二五六、三八〇	一三二二〇、四八六	一二四六、四九八 一七二、四一四 一六三、八九六	三五六、〇〇四 四八、五八八
同	同	同	同	同	同	洋鎗 信砲 洋砲 克砲 洋馬鎗	洋鎗 信砲 洋馬鎗
三五七八	二六四三	二三五〇	一八四五	五三八七	四二三八	一五八〇 二五八〇 四三三八	一九二〇 一七七〇 四五六〇

北清事事情

安徽省 步兵	四、九四〇	三五九、九〇四	洋槍	三九八〇
安徽省 騎兵	四一〇	三三三、二五二	洋馬槍	二八〇〇
山西省 步兵	九七〇	六七、七七六	洋槍	七六〇
湖南省 步兵	一、〇〇〇	一四一、五四〇	洋槍	一七六〇
江西省 步兵	五一〇	四五、一八〇	洋槍	四一〇
甘肅省 步兵	三五八	二六、〇〇四	洋槍	三五八
雲南省 步兵	六五八	五八、六四四	洋槍	六〇六
貴州省 步兵	五三四	四二、六三六	洋槍	四八〇
計 步兵	八九、八九五	六一八九、二七四	洋槍	七〇五五七
計 砲兵	二、二七二	一七二、四一四	洋砲	一一〇二
計 騎兵	四、九二一	三四一、五二九	洋馬槍	四二一〇
大計	九七、〇八〇	六七〇三、二一一	砲槍	七四七六七
				一五五〇

清國陸海軍制 (九七)

以上八旗、綠旗、練軍、勇兵の總數を掲出せば左の如し

八旗	二六一、五五五	銀	六五三二、八五二	米	三〇三二、二六二	石	
綠旗	五〇六、五九一	銀	七五四四、九八五	鳥槍	四四七三八九		
練軍	一三八、二八四	銀	一三三三〇、四八六	洋槍	一八九一九九		
勇兵	九七、〇八〇	銀	六七〇三、二一七	洋槍	七四七六七		
總陸軍	一一一三、五〇九	銀	三三九〇一、五四〇	鳥槍	四四七三八九		
		米	三〇三二、二六二	洋槍	二六三九六六		
			洋銀四八四三〇七七一元	砲	一五五〇		

因に云ふ清國に於ける鳥槍は所謂火繩銃にして洋槍は西洋式小銃と知るべし

右の練軍及び勇兵は總稱して之を鄉勇とも稱せり曾て長髮賊の亂起るや以上の八旗練旗兵は怯懦にして用ふるに足らざるを以

名稱 兵數 歳費 兩 軍器

十。八。挺。外。に。信。砲。千。五。百。五。十。挺。及。び。克。砲。十。四。砲。八。に。し。て。信。砲。克。砲。
 三。萬。餘。兵。中。無。銃。器。の。も。の。は。無。慮。十。三。萬。六。千。八。百。〇。五。名。の。多。き。あ。
 清。人。の。兵。役。に。於。け。る。元。來。我。國。の。如。く。國。民。の。義。務。と。し。て。斯。く。の。如。し。
 謂。一。種。の。生。活。法。と。見。做。し。其。志。願。者。は。年。に。老。幼。の。區。別。な。く。身。體。に。所。
 長。短。の。規。定。な。し。唯。腕。力。の。乘。に。過。ぐ。る。も。及。び。走。行。の。敏。速。な。る。を。
 以。て。驍。勇。と。す。る。に。過。ぎ。ず。其。用。を。爲。さ。る。假。令。百。萬。の。置。兵。あり。と。雖。
 も。實。用。に。供。する。に。至。て。は。其。用。を。爲。さ。る。假。令。百。萬。の。置。兵。あり。と。雖。
 の。勇。兵。中。實。戰。の。用。を。爲。す。も。の。は。二。三。萬。に。過。ぎ。ず。と。云。ふ。所。以。あり。
 現。ん。や。彼。の。入。旗。綫。旗。の。法。備。性。と。あ。り。火。繩。銃。弓。箭。を。以。て。敵。に。向。は。

二。名。に。對。し。洋。銃。十。一。萬。八。千。二。百。六。十。三。挺。と。馬。銃。七。萬。五。千。三。百。六。十。
 總。計。に。由。り。之。を。比。較。せ。ば。其。事。實。の。相。違。な。き。能。は。す。試。み。に。彼。等。が。兵。數。と。銃。器。
 四。百。九。十。二。挺。に。し。て。兵。數。に。對。す。る。殆。ん。ど。二。千。挺。の。不。足。な。り。又。其。
 僅。か。に。九。千。八。百。四。十。六。挺。と。馬。銃。八。千。五。百。四。十。六。挺。の。對。す。る。銃。數。は。
 數。ど。を。比。較。せ。よ。其。二。萬。〇。四。百。八。十。七。人。福。建。の。部。に。對。す。る。銃。數。は。
 る。に。於。て。は。表。裏。事。實。の。相。違。な。き。能。は。す。試。み。に。彼。等。が。兵。數。と。銃。器。
 見。清。國。常。備。兵。中。の。骨。子。た。る。が。如。し。と。雖。も。更。に。詳。細。の。觀。察。を。遂。ぐ。
 す。る。に。至。れ。り。而。し。て。其。訓。練。銃。器。等。都。て。洋。式。に。摸。倣。す。る。を。以。て。一。
 先。づ。其。手。兵。を。洋。式。に。習。は。し。め。初。め。て。討。賊。の。効。を。奏。し。得。たり。と。云。
 遙。に。從。來。の。清。兵。に。勝。る。高。々。あ。る。よ。り。流。石。の。鴻。章。も。大。に。威。激。し。て。
 人。の。助。勢。せ。ん。と。云。ふ。の。あ。り。鴻。章。即。ち。其。請。を。容。れ。た。る。に。其。技。術。
 李。鴻。章。も。亦。征。討。に。從。事。せ。し。が。後。浙。江。省。に。入。り。上。海。に。至。る。や。歐。米。
 て。曾。國。藩。主。と。し。て。之。を。募。集。訓。練。し。一。時。の。用。に。供。せ。り。と。云。ふ。當。時。

(五八) 清國陸海軍制

艦名	艦種	噸數	長	サ	馬力	幅員	乗込人員	吃水	艦質	大砲	進水年月	速力
海星	巡洋艦	三四〇〇	二七六〇	未詳	一七五〇	四七〇〇	三七二	三〇〇	木	二六	明治六年	一二
馭遠	巡洋艦	二六〇〇	二七七〇	未詳	未詳	未詳	三七二	未詳	木	二六	未詳	一四
南瑞	巡洋艦	二二〇〇	二七七〇	未詳	二四〇〇	三八〇〇	二五〇	一七〇	鋼	二〇	同十五年	一四半
南琛	巡洋艦	二二〇〇	二七七〇	未詳	二四〇〇	三八〇〇	二五〇	一七〇	鋼	二〇	同十五年	一四半
開濟	巡洋艦	二二五三	二五三三	未詳	二四〇〇	三六一九	二七〇	一五六三	鋼	一二	同十六年	一五
凱濟	巡洋艦	一六〇〇	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	木	一二	同十六年	一六
保民	巡洋艦	一四七七	二二七〇	未詳	二四〇〇	三六〇〇	未詳	二四〇	木	八	同十七年	一六
寶泰	巡洋艦	一四七七	未詳	未詳	二四〇〇	未詳	未詳	未詳	木	八	同十七年	一六
澄慶	巡洋艦	二二〇九	未詳	未詳	七五〇	未詳	未詳	未詳	木	未詳	同十九年	一五
威靖	巡洋艦	二二〇九	未詳	未詳	七五〇	未詳	未詳	未詳	木	未詳	同十九年	一五
鈞和	巡洋艦	未詳	未詳	未詳	六〇〇	一六六四	三〇〇	未詳	木	未詳	同十五年	一一
右戰艦												
登瀛州通報艦		一二五八	未詳	未詳	六〇〇	未詳	一八〇	未詳	木	五	同九年	一〇
測海砲艦		七〇〇	八八〇	未詳	四三〇	二七四〇	一六〇	未詳	木	五	未詳	一一〇
操江砲艦		五七二	二七四〇	未詳	四〇〇	四三〇	一二〇	未詳	甲	五	同十五年	未詳
金甌		未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳	鐵	三	同十五年	未詳
飛雲		四〇〇	二二〇〇	未詳	三一〇	三〇〇〇	一一八	八〇	鐵	五	同十年	九

北清軍事事情 (四八)

艦名	艦種	噸數	馬力	幅員	乗込人員	吃水	艦質	大砲	進水年月	速力
雷隊第一號		九〇〇			一七					
艇隊第二號		五九七			一六					
隊右第三號		五九七			一六					
計六艘					一六					
總計		艦數	噸數	馬力數	乗込人員					
戰艦		一〇	三三五五	四五七五五						
守艦		一一	三六六二	三〇六〇						
運糧艦		一三	二四〇九	一五九〇						
魚雷艇		六	七三五	一一〇						
魚雷艇陸上取存のもの		六								
歲費		一百〇八萬四千百兩								
南洋艦隊										

此外定鎮兩號に附屬するもの四艘と別に二艘あり何れも旅順口に收存すと云ふ

(七八) 清國陸軍海軍制

艦名	噸數	長	馬力	幅員	定員	吃水	大砲	進水年月	速力
鐵甲	一九五	一〇四	一九五	二〇四	未詳	未詳	未詳	未詳	未詳
海東雄	二〇〇	未詳	七五	未詳	七〇	未詳	六同	十五年	未詳
緝西	二二〇	未詳	八〇	未詳	八五	未詳	四同	四年	未詳
鎮濟	二二二	未詳	七五	未詳	八〇	未詳	七同	九年	八
安瀾	二二二	未詳	一八〇	未詳	七〇	未詳	四同	三年	未詳
綏靖	未詳	未詳	一八〇	未詳	六八	未詳	四同	三年	未詳
廣安	六〇〇	未詳	一八〇	未詳	六〇	未詳	四同	詳	未詳
蓬州	六〇〇	未詳	四八〇	未詳	二〇	未詳	六同	九年	未詳
琛航	一三九	未詳	五五〇	未詳	九〇	未詳	二同	五年	未詳
永保	一三九	未詳	五五〇	未詳	九〇	未詳	二同	上	未詳
海鏡	一四五	二〇〇	六〇〇	三三九	一八〇	九八	三同	六年	九

計七艘 六六九〇 三九一〇 九九〇
 外に水雷艇一艘あり
 廣東艦隊

(六八) 北清軍事事情

艦名	噸數	長	馬力	幅員	乘員	吃水	大砲	進水年月	速力
海鏡	一五〇	未詳	八〇	未詳	七〇	未詳	七同	十五年	未詳
虎威	三一九	一一八	三一〇	二七〇	一一八	七〇	五同	九年	九二五
龍騰	三一九	一一八	三一〇	二七〇	一一八	七〇	五同	九年	九二五
策電	四〇〇	一二〇	三一〇	三二〇	一一八	八〇	五同	十年	九
計二十艘	運守艦	艦數	噸數	馬力	乘員	吃水	大砲 <td>進水年月 <td>速力</td> </td>	進水年月 <td>速力</td>	速力
福建艦隊	八	一一	一八四	一五六	一五〇	一八〇	一八四	九四四	九四四
定遠	六〇〇	一六八	四八〇	二六三	一〇〇	一〇五	五同	四年	八乃至十
靖遠	六〇〇	一六八	四八〇	二六三	一〇〇	一〇五	五同	五年	八乃至十
超武	二二〇	一九二	七五〇	二八三	一八〇	二三四	五同	十年	一一五
元凱	二二五	二〇三	六〇〇	三三九	一八〇	二五二	二同	八年	一〇〇
伏波	二二五	二〇三	六〇〇	三三九	一八〇	二五二	二同	三年	一二
泰安	二二五	二〇三	六〇〇	三三九	一八〇	二五二	五同	九年	一二
艦名	噸數 <td>長 <td>馬力 <td>幅員 <td>乘員 <td>吃水 <td>大砲 <td>進水年月 <td>速力 </td></td></td></td></td></td></td></td>	長 <td>馬力 <td>幅員 <td>乘員 <td>吃水 <td>大砲 <td>進水年月 <td>速力 </td></td></td></td></td></td></td>	馬力 <td>幅員 <td>乘員 <td>吃水 <td>大砲 <td>進水年月 <td>速力 </td></td></td></td></td></td>	幅員 <td>乘員 <td>吃水 <td>大砲 <td>進水年月 <td>速力 </td></td></td></td></td>	乘員 <td>吃水 <td>大砲 <td>進水年月 <td>速力 </td></td></td></td>	吃水 <td>大砲 <td>進水年月 <td>速力 </td></td></td>	大砲 <td>進水年月 <td>速力 </td></td>	進水年月 <td>速力 </td>	速力
福建艦隊	八	一一	一八四	一五六	一五〇	一八〇	一八四	九四四	九四四

清國陸海軍制 (一九)

北洋艦隊は清國五水軍中の重なるものにして直隸總督李鴻章の管理する所なり今より數年前には南洋艦隊を以て最盛とせしも今は遙かに之を凌駕せり蓋し清國海軍の一進歩と云可し然れ共從來我國人は曾に其艦數と大砲のみに着眼して決して侮る可らずと吹聴し其實況を詳かにするを得ざらしむ大なる誤解と云ふべし抑も今日の如く各國進歩を競ふの時に當り殊に英露佛等の軍艦を目撃したるものは決して清國海軍を以て同一進歩中に措く可らざるや明かなりとす近時日清交戦に就て稍や其實況を窺知するを得たるが如くなるも予を以て之を見る彼が七十有餘の兵艦も其二三を除けば更に交戦の用を爲さざるなり殊に艦中常に西人兩三人を置き機關の運轉射撃の方法等頗る研究しつゝ、あるも清人の性質として到底大軍艦を操縦するの氣力なく彼の水兵及び機關士輩は一旦旅順口若くは天津等に於て練習し而して艦中に服役するも常に西人の指揮に従ひ西人なくんば一も其用

北清事情 (〇九)

馬尾船塢二	同	六十萬兩
廣東船塢二	同	未詳
旅順船塢局	同	六萬兩
計		一百萬兩
北京火葯製造所	官設機器局	八十名
天津機器東局	職工	一千名
同海光寺機器局	同	五百名
威海機器局	同	五十名
江南機器局	同	一千二百五十名
南京製造局	同	三百六十名
安徽安慶府製造局	同	八十名
廣東離明館火葯製造所	同	五十名
同器機製造所	同	四十名
同軍裝局	同	二百名
杭州府軍裝總局	同	二百名
計		三千七百六十名
但陸軍に關する兵器製造所は記入せず		百四十二萬千四百兩
		五萬兩
		四十萬兩
		十五萬兩
		一萬五千兩
		六十萬兩
		七萬兩
		五萬兩
		九千六百兩
		三十萬兩
		三十萬兩

を爲す能はざるなり又帆船の習練者の如きも獨り帆船のみにあ
らざれば他の船艦には決して其用を爲さざるなり故に清國の軍
艦は最初十八海哩の速力ありしも漸次遅鈍となりて三五年を過
れば十五海哩となり七八年を過ぐれば遂に十二海哩となる道は
清國海軍の能にして官民共に敢て之を怪まず特に甚しきものは
海軍衙門の將校及び北京政府の官吏にしてアームストロング砲
一發の費用は幾何を要する哉否を知らざるもの多きに居ると云
ふ蓋し予は清國の海軍は今後幾年を過ぐるも到底其發達を望む
べからずと言はんと言はんとす若し我國人にして彼が船底に附着するカ
キの老なるを見又艦中常に西人の潜伏するを見れば必らず予の
言の妄ならざるを信せんか
強盛を以て誇る北洋艦隊にして以上陳るが如し以下南洋艦隊及
び福建廣東等推して知るべし然れども南洋艦隊の上には於て特に
注意すべきは士官水兵の技術の北洋艦隊に勝る事是なり(亞細亞

大陸旅行日誌中にも屢々之を陳(元來清國の百事は都て南方人
に由て成るもの多く南方人は常に西人の事業を目撃し且つ自身
も海外に出るを以て文明的の事物は獨り南人の占る所とされり
現に清國海軍士官中福建出身者は學術技藝の劣等なるにも拘ら
ず常に北人の上に於て慣習を訓練致せる程なれば其船艦の老朽
用ふるに足らざる割合には操縦者は却て用を爲すものありと覺
悟せざるべからず南洋艦隊の碇場は上海吳淞間を以てし南洋
海軍大臣は南京に駐在す而して其警備區域は長江一帯及び黃海
沿岸にして現時は日清交戦中ければ北洋艦隊に合して共に防備
に供ふと云ふ
福建廣東兩艦隊は小砲艦數を以て組織せるも戰時の用に供する
より寧ろ平時に在て海賊殲滅の用と爲すに過ぎざれば到底之を
以て我敵艦とするに足らざるなり殊に多くは二十餘年前の製造
に係る老朽艦なれば縱し噸數馬力は一千以上なるも恰かも之れ

死馬の白骨を評價するど一般ならんのみ
長江水軍は曾國藩が長髮賊討滅の爲め募集せるものにして其の
船形は我が大阪附近の上荷船の大なるものにして艦部に士官三人
を置く水兵は二十八人船方は六人砲手は三人船長即ち士官三人
或は一人を置く長江の上流宜昌府より下流江蘇の海口に至る數
千里の間幾個の營所を設け守衛甚だ嚴なるが如しと雖も實際は
外敵を防ぐに足らざるべし何となれば其船体は木造にして緩少
なり砲は自國製の一少砲を裝ふに過ぎず之を以て我鐵艦に向
はんとはす蝟臂の車に當らんとする者あり噫危哉
征清の方略に就て予は已に北清の事情として道路氣候人情習慣
若くは軍事上の觀察より各都城の概況を記述せしを以て今は予
の自論たる征清の方略を一言せん抑々清人は既に陳ぶるが
如く敗を以て敗とせず耻を以て耻とせざる一種の人類なれば假
令其衆を殲も其民を滅絶するも未だ恬として顧慮する所を知ら

す去れば戦勝て幾十億萬の價金を出さしむるとせんか彼れが國
幣の貧弱なる到底之を負擔し得る所にあらず土地を占領せんか
水質不良氣候不順にして又我國民の永住すべき所にあらず開港
を促さんか既に開くもの廿五ヶ所あり此上は徒だ北京都城を開
放せしめ其他二三の要地を開くに過ぎざるべし古來清國と交戦
するもの假令外面上勝戦の名ありとするも退て之を精算せば利
害相償ふに足らざるもの少からず現に佛國は福州戦争の結果と
して安南を保護國とせしも目下は支出の收入を償はざる耳なら
ず前途の望みなきが爲め殆んど之を持て餘せりとは今日の實況
に於て噴々内外人の口端に登る所とす英國は其聯合軍の要償と
して數港を開らさ又香港を占領したるも東洋進化的結果は永く
英國の利を全うする事能はずして貿易の中心點は漸次東方に進
み現今は上海の繁榮香港を凌ぐに至れり今後西比利亞鐵道落成
しニカラガの開墾其効を幾んか上海の繁榮も亦我國に移るべし

果して然らば香港の今日は實に消極の形勢にして我は又積極の地位にありと云はんのみ
我臺灣の役は價金五十萬兩を得て我の全勝となりたるものなり
然れども計算上の利害に着眼せば必ずや思ひ半に過ぐるもの
あらん清人の優柔不斷にして外交上常に曠日彌久を以て秘訣と
する所以のものは結局其國利あるが爲めなり去れば今後の征清
方略は北京城を攻撃するが如き最も迂策にして(北京城は既に據
廢して更に其實價なき者あれば彼等は名分の何たるを解得せず
故に今後幾回落城等の事あるも決して之を遺憾とせざるべし)我
軍は先づ滿州三省を討平し直に諸般の行政事務を改正して茲に
百年の長計を爲すにあり而して一方には朝鮮國の内政改革を監督
敷設工事に便利を與へ又一方には愈々朝鮮國の自由を任
し以て清國に當るに在り斯の如くにして談判は清國の自由を任
せ彼來て滿州の地を回復せんと欲せば我が要求を承諾すべし若

し夫れ彼が兵馬の間に之を得んとすれば來れ又我の好んで應戰
を辭せざる所と爲すべし滿州は氣候寒冷なりと雖も産物の夥多
なる擧て數ふべからず彼が砂金山及び石金鑛に富み又石炭其他
の鑛物を有するは廣く世人の知悉する所なれば好し我の占領地
として數百年間之を保つも決して損失をかるべし殊に彼の奉天
には數千萬兩の時金ありと傳ふるに於てをや而して我は猶他に
深く考ふ可きものあり我若し滿州を占領し百年の長計を樹立せ
んか清皇は遂に北京を保つ事能はざるに至るべし何となれば清
皇に於ける滿州は所謂我伊勢の太廟の如く或は西京の如き關係
を有するを以て平時露に備ふる甚だ切なるを見るべし然るを我
兵一隊之を占領す彼の痛嘆知るべき耳去れば清皇は遂に西北の
地蒙古に走らざるを得ず而して蒙古も亦漸次露の進襲あるを以
て必竟永住の地にあらず南方江寧(即ち南京)に走らんか明末の反
賊匪を接して起らん此時に於ける清皇は遂に腰を屈して我軍門

に降るの外あし於是乎我は清皇を以て第二の朝鮮と見做し之を
 東三省に封じ以て我義を世界に表彰するにあり是或は我に於て
 幾多の損失ありと爲すも東洋政略の將來を考察せば我損失は遂
 に償ふの期なきにあらざるなり而して滿州を獨立せしめて清皇
 の未裔を封じ一段落を告る時は第三の敵は明末の民衆にあり然
 れども這は又容易に其平定を告ぐるの法略あり元來明末の
 は孔孟を信する尤も厚きを以て孔子の末葉を擧げて之を封じ現
 今山東省曲阜にあり後明皇帝の稱號を附するなり斯くの如く
 ば支那中央部は一丸を放たず一兵を失せず我赫々たる威武を老
 大帝國の版圖に宣揚し茲に初めて東洋全局の平和を把持し得べ
 し以上の方略を施すの間我目的を障礙せんとするものは唯之を
 防ぎ之を説伏するに在り而して其は外交家其人の技倆如何にあ
 り唯夫れ技倆如何にあるのみ

地實誌 北清事情終

明治二十七年九月廿八日印刷
明治二十七年十月二日發行

定價金十五錢

版權
所有

編輯者

原田藤一郎

發行兼版權所有者

著尾寅之助

印刷者

平島曠

印刷所

東京日本橋區上橫町十六番地
八重洲橋活版所

發賣所

東京市京橋區南傳馬町二丁目

青木嵩山堂

大坂市東區心齋橋通博勢町角

青木嵩山堂

青木嵩山堂新版廣告

亞細亞大陸旅行者原田藤一郎君校閱
青木恒三郎製圖

日清韓三國大地圖

大形石版美麗
彩色摺
堅三尺五寸
橫五尺

定價金壹圓、特別正價金五拾錢、郵稅拾貳錢

全掛軸仕立

特別正價金壹圓
全國運送貨廿錢

本地圖購求諸君ニ限リ今般陸海軍大勝利ヲ祝シ十月
月中(旅客必携)支那內地案内一部ヲ

無代價進呈ス

弊店ニ支那新地圖ヲ出版スルヤ精巧詳密ヲ以テ
普ク江湖ノ歡迎ヲ受ケ旬日ヲ出デズシテ數万部ノ
多キヲ盡スヲ得タリ今亦愛顧ノ榮ニ酬ハン爲メ莫
大ノ資ヲ抛チ日夜製圖ニ從事シ銳意苦心茲ニ精密
詳細ナル大地圖ヲ出版セリ
此圖ハ日本國郡、支那十九省、朝鮮八道ヲ彩色ニテ
分チ郡邑、村落、山川、湖沼、港灣、島嶼、城郭要害砲
臺航海線路、海底電信ノ里程等遺漏ナク載掲ス且
ツ地圖大ナル爲メ從テ文字大ナルバ閱覽ニ大便宜

掛軸仕立

ヲ與ヘハ室內裝飾トナリ一
殊ニ得ベシ誠ニ一舉兩得ト云フ可シ當時三國地圖
ノ出版多シト雖モ本圖ノ如キ最大最新最精最密ノ
良地圖ハアラジ愛國ノ諸士至急御購覽ノ上我軍ノ
向フ部署ヲ知ラレンコトヲ

亞細亞大陸旅行者原田藤一郎君校閱
青木恒三郎君編輯

支那內地案内

西洋綴全一冊寫真
石版圖畫十葉挿入
特別正價金十五錢
郵稅四錢

本圖ハ支那ノ都府ヨリ内地ノ村邑、城郭、山川、湖
沼經緯度地理、人口、陸海軍ノ兵力軍
備、諸官省ノ位置、各驛間ノ里程及ビ名所
タル案内記ナリ且ツ本圖ハ支那内地探檢者原田藤
一郎君ノ校閱ニカ、レバ其記事ノ正確詳細ナル弊
店ノ誓テ保證スル所今ヤ我兵ノ向フ所威風凜然、
海陸敵ナシ是ニ於テカ彼ノ里程地理軍備等ヲ知得

スルハ我國民ノ最大急務ナラン諸子幸ニ愛讀ノ榮ヲ給ヘ

十月上旬賣出

英和日清戰爭寫真畫譜 全一冊

寫真亞鉛版美畫十二葉英和對譯記事廿四ページ特別正價二十錢郵稅萬國共特別不要

天兵朝鮮ノ獨立ヲ援ケ我捷報陸續至リ今ヤ清兵鷄林ニ片影ヲ止メザルニ至ル然ルニ校豚資金ヲ以テ外國新聞記者ニ送リ頻リニ日敗清勝ノ倒報逆開ヲ傳ヘシム邦人何ゾ切齒ニ堪ン乎弊堂亦大ニ慨歎ニ堪ヘス畫工ヲ戰地ニ送り實地ヲ探リ眞況ヲ寫シ英和兩文以テ戰況ヲ詳ニシ VICTORY (勝利)ト題シ海外官省公會ニ送リ大ニ我が軍ノ勇猛ナルヲ知ラシメントス世ノ同感ノ諸君ハ幸ニ購求ノ上海外ノ知人ニ送附アラントヲ希望ス製本ノ美麗繪畫ノ勇壯巧致ナルハ我が美術ヲ海外ニ知ラシムルノ一端タラン幸ニ忠勇ナル諸君ノ贊成アラントヲ懇願ス

北京陷落近キニアラン

清版石印北京城之圖

石版彩色美麗街衢明細

ノ想ヒアリテ彼ノ單ニ新聞紙ノ切抜ヲ以テ一時ヲ購着スルモノト固ヨリ同日ノ論ニ非ズ乞フ愛國ノ士幸ニ購讀ヲ賜エ

戰國世完全ナル地圖

座右ニ欠クベカラズ

亞細亞大陸旅行者原田藤一郎君校閱 青木恒三郎製圖 二十七年八月廿五日發行

此地圖ハ清國十九省及朝鮮八道ヲ彩色ヲ以テ分チ山川港灣海底電信航海線路里數等ニ至ルマデ明細ナリ特ニ本圖ハ清國及朝鮮ヲ連續ニ記載シ我大日本帝國地圖ヲモ附記シタレバ一目東邦ノ形勢ヲ知ルベク特ニ清國北滿盛京省等ハ詳細ヲ極メタリ且ツ原圖ハ亞細亞大陸旅行者原田藤一郎君ガ實地ヲ踏査セシ際携帶ノ地圖ヲ摸セシモノナレバ最モ確實ニシテ新タナリ加フルニ圖傍北京天津上海其他各港京城仁川等ノ地圖ヲ掲ゲタレバ一規戰地ノ形現ヲ知ルベシ有志愛國ノ諸君幸ニ購覽アレ

新版正確ナル最良地圖

全一冊 折本 正價十五錢 郵稅二錢
本書ハ日本稀有ノ珍書ニシテ我公使館員某ガ珍藏セルモノヲ乞フテ出版シ現今ノ各公使館其他百官諸省ノ位置ヲ新ニ記入シタルモノニシテ其面積人口戶數及沿革ヲモ録シタレバ亦清國ニモナキ珍書ナリ

東亞通史村松恒一郎君編輯

京城之凱旋

凱旋祝トシテ二千部限郵稅ヲ要セズ

日清海陸戰記第壹卷 洋綴判寫真鉛版圖美本全壹冊
正價 金貳拾錢
清韓ノ天、砲煙漲リ彈雨注グ、清韓ノ海嶽鐘奔馳シテ波浪高ク、曰ク京城ノ小戰曰ク豐島ノ海戰曰ク牙山ノ陸戰曰ク威海衛ノ進擊、一トシテ我レノ大勝タラザルハナシ何ゾ壯快ナルヤ、本書ハ詳ニ是等ノ既因ヨリ我出兵及ビ戰鬪ノ狀況ヲ網羅シ盡シテ兩國談判ノ破裂京城ノ小戰大院君ノ入闕新政府ノ樹立新内閣ノ任命豊島ノ大勝成敗ノ激戰諸將士ノ奮闘ヲ始メ其他此間ニ於ケル奇事異聞山ノ如ク而カモ其材料ハ當時實際ニ其事ニ從ヒタル人ノ筆記ニ係リ最モ雄大ノ筆ヲ以テ最モ快活ニ其實況ヲ寫出セルモノナレバ一タビ本書ヲ讀ク時ハ躬自ラ現場ニ往來シテ親ク龍奮虎闘ノ狀ヲ目撃スル

嵩山堂製圖

增訂八道朝鮮地圖

大形折本石版鳥ノ子紙摺彩色入正價金拾錢郵稅貳錢

本書ハ朝鮮八道ノ山川海陸ヲ明細ニ記載シタル最良地圖ニシテ府縣郡監司令要港村落等ニ至ルマテ掲出シ且ツ豊閣征伐ノ古戰場ニ至リテハ符號ヲ以テ此處ハ加藤清正ガ韓ノ二王子ヲ俘ニス此處ハ島津義弘大勝利アリ斬首三萬アリシ所等ヲ詳細ニ記載シ一覽今昔ノ戰地ヲ知ルベシ愛國ノ士ハ此圖ニ因テ日本魂ヲ養成セラレンコトヲ
文章快活ト意尙之嶄新を以て其名朝野に噴々たる鐵腸居士の著書が發行毎に大歡迎を受けたるは皆人之知る所なり而して其政治小説は居士特色とし著く政治小説と云へば必ず居士を推すに至る是他なし居士は政治思想を以て徹頭徹尾意趣を構成したるに由る故に其小説は快刀亂麻を斷つが如く最愉快に最樂し愛國の諸士は愉快の中に政治思想を知らんと欲せば請ふ左之書を讀め

末廣鐵腸居士著

政治小説 明治四十年之日本

全二冊

前編四版

西洋綴挿畫美製本一冊

後編三版

西洋綴挿畫美製本一冊

前年著者ノ手ニ成リシ二十三年未來記ハ如何ニ世間ニ向フテ感動ヲ與ヘタルヤ此書ハ即チ今ヨリ三十年ノ後ニ起ルベキ政治上ノ未來記ナリ著者ガ此ノ一大著述ヲ爲スベキタメ浦潮朝鮮等ヲ漫遊シテ材料ヲ蒐集セシトハ已ニ「東亞」ノ大勢「」緒言ニ揭ゲリ一紳士ノ西比利亞鐵道ニ乘ツテ歸朝シ内外形勢ノ切迫ヲ痛歎スルヨリ筆ヲ起シ保守黨ノ夜會アリ急激黨ノ陰謀アリ汽船ノ沈没アリ才子佳人ノ海外ニ相逢フ奇談アリ就中日日本海ニ於テ日清英聯合軍ノ露艦ヲ砲擊沈没セシメタル砲聲轟々紙上ニ響ク快又快

四

現象ヲ照出スル一大秦鏡ナリ此書ノ出ルヤ幾多ノ新聞紙口ヲ極メテ賞賛ス 今ヤ世界第一等ノ新紙倫敦タイムズニモ長文ノ批評ヲ掲タリ 蓋シ我國ノ小注意ヲ惹起シタルハ實ニ本書ヲ以テ嚆矢トス之レ本書ノ未來ヲ摘發シ時勢ヲ洞察シ最モ價値アル所也

○東亞の商業、地理、政治、事業、對外策以上の項目は左之兩書能ク證明して餘す所なし故に此兩書は朝、清、露、英、佛、の五ヶ國に翻譯出版せらるる以て有益の書たる知る可し

前朝鮮 大石正己君著

再版日本之三大政策

西洋綴全一冊 特別正價三十錢 郵稅四錢 日清兩國ハ將來如何ナル地位ニ立ツベキカ、亞細亞ハ將來如何ナル運命ヲ有スベキカ、殊ニ三大國港ハ如何ニ開築セラルベキカ三大鐵道ハ如何ニ聯絡セラルベキカ、四大航路ハ如何ニ擴張セラルベ

鐵腸居士未廣重恭君著 訂正 東亞之大勢

西洋綴全一冊 特別正價三十錢 郵稅六錢

日本帝國の位置を知らんと欲せば我と相對する隣國の形勢を究めざるべからず鐵腸居士茲に見る所あり長風浪を蹴て西比利亞に赴き夫れより朝鮮諸港を歴遊して北支那に出で轉じて韓城に入り専ら

鐵腸居士未廣重恭君著 北征錄

附 北遊草 西洋綴美製本全一冊 特別正價金三十錢 郵稅四錢

三國の形勢を調査し歸朝後更に許多の材料を集め屏居數月の後此大著述あり西比利亞大鐵道の最況より筆を起し海陸軍備露清英の關係露國の東洋に於ける未來の勢力を論じ我國と政事上商業上の關係を明かにし進んで朝鮮の形勢を論破し更に支那の日々發達する有様を擧げて我國人の注意を喚起し考證精密議論確實文章亦之れと協ふ今や東亞の形勢は日一日と逼迫するに非ずや商業家政事家愛國家たる此際之を一讀せざる可からず

五

理商業を詳述したるも加ふるに美麗の實景圖は讀者をして親く其地を觀るの想あらしむ附する所の北遊草には金角港を始め支那朝鮮の各地に於る古今體詩十餘を掲ぐ夫れ錦上の花とは是等の體款

陣幕久五郎序並校閱
岡本半溪翁編著
四十八
手圖解 **相撲寶鑑** 全一冊西洋綴美本 特別正價廿二錢 郵稅四錢

身體強健を欲せば活潑運動に如くはなし活潑なる運動とは即ち相撲也當に角力は身體壯健とあるのみならず強を挫き敵を仆すを以て愉快爽快たるも本書は角力の沿革より弓取、行事、御幣、水引幕、其他角力に關する古實及式法を記し四十八手の取方は裏表とも一々圖畫を以て説明せるを以て容易に獨習熟練し得べく大敵強者も即坐に仆し得べし快男兒壯夫たらん人は本書を坐右に供せられよ

日本之譽爲吾身

從二位伯爵勝安房公題字 榊原健吉君校閱并跋
正四位子爵山岡鐵太郎公序

注意

近頃有名無實到底行ふ可らざる處書を出版し誇大なる廣告を以て諸君を欺くもの有之候元より弊堂の書と雲泥に候間御購求之節は賢くと著者發行所に御注意被下度爲念申添へ候

愛國ノ士ハ本書ヲ讀メ

正四位伯爵勝安房公題字 榊原健吉君校閱并跋
田子信重先生教授
松廼舍井ノ口先生著述
活自在是吾人の最快とする所
第五 **武道圖解秘訣** 全一冊 西洋綴美本 特別減價金十五錢 郵稅四錢

本書ハ柔術劍棒圖解ノ後篇ニシテ木太刀長刀弓術早細水泳活法首釣水死ノ活シ方居合抜法等各條口傳秘訣ノ蘊奧ヲ極メタレバ一度ビ本書ヲ讀ケバ人ヲシテ驚懼疑惑ノ怯心ヲ去リ赤手モ能ク鬼ヲ挫クハク一木片ヲ得バ大敵モ恐ルベカラザル勇氣ヲ興起セシム故ニ之レヲ小ニシテハ身ノ爲メ人ノ爲メ之ヲ大ニシテハ國ノ爲メニス可シ要スルニ時間ヲ徒消シ且ツ健康ヲ害スルノ遊戯ト日ヲ同フシテ語ルベカラズ本書世ニ出ツレバ實ニ再ビ日本魂ノ光

第十版 柔術劍棒圖解秘訣

松廼舍井ノ口松之助君著
西洋綴美全一冊 特別減價金十二錢 郵稅四錢
維新以來人民柔弱ニ流レ尙武的思想去テ影ナシ何ヲ以テ日光ヲ外國ニ輝サン見ズヤ我國ハ日本魂ヲ一字ヲ以テ「朝日に匂ふ山櫻花」ト比シタルニ非ズヤ尙武的思想ヲ尊ブニ非ラズヤ彼體操何スルモノゾ之レ碧眼兒ノ小技ノミ器械ノミ今ハ小技的器械的ニ離觀タル時代ニ非ラズ滔々タル大勢ハ一箇千里ノ勢ヲ以テ我日本ニ注入シツ、有ルニ非ズヤ此際國光ヲ輝カシ一身ヲ護リ日本魂ヲ發揮セント欲セバ宜ク尙武的柔術劍棒ヲ習ハザル可ラズ本書ハ即チ此道ノ達人ヲ以テ有名ナル榊原健吉君ノ校閱ヲ經テ柔術劍法半棒等ノ打込構ヘヲ一々親シク眼前ニ在テ教授スルガ如ク百二十餘ノ詳細ナル圖ヲ挿入シ叮嚀親切ニ記載シタル秘書ナリ且ツ亦古ヨリ各流ノ秘傳ニカ、ル奧義ハ漏スコトナク早繩當身九字秘法等マテ詳記シタル軍人警官ハ勿論苟モ我身ヲ愛シ身體ノ強健ナランコトヲ欲スル諸君ハ一本ヲ購フテ日本魂ノ本源ヲ養成セザル可ラズ

揮ヲ放ツモノト謂フベシ

愉快にして活潑なるは劍舞なり

榊原健吉君校閱并序 福井茂兵衛君著

劍舞獨習圖解秘訣

一名柔術劍棒圖解秘訣續篇
西洋綴美製全一冊 特別正價金十五錢 郵稅四錢
本書ハ柔術劍棒圖解秘訣ノ續編ニシテ古今ノ英雄豪傑ガ世ヲ慨シ時ヲ罵リタル慷慨悲歌數百篇ト都下ニ流行スル勇壯ナル愉快ナル新作數篇ニ柔術劍棒圖解秘訣ノ如ク一々精細ナル圖畫ト親切ナル説明ヲ附シ一篇ノ詩數十個ノ圖ヲ示シタルハ彼ノ「エジソン」ノ探影術ノ如ク、手ノ舞フ處、足ノ踏ム處、縱橫搏撃、白刃翻々流星ノ如ク水ノ激スルガ如ク卷ヲ開ケバ勇氣ノ勃然英氣ノ凜然タルヲ覺ハシム精英ナル青年諸君國家ノ健兒タラムト欲セバ請フ本書ヲ讀ケ

附言 本書ノ劍舞法ハ在來世上ニ有リ觸レタル素人細工ノ書ニ非ズ專門家タル東京壯士俳優福井君ノ秘訣タレハ茲ニ廣告ス

●護身的の最良要書

面白き哉柔術や愛すべき哉柔術や
彼は予等を強健に爲さしめたり

正三位 伯爵勝 安房君題辭

正三位 子爵三好重臣君題辭

從三位 子爵海江田信義君題辭

高等師範學校長嘉納治五郎君序文

吉田千春、磯又右衛門合著 柳原健吉君跋

(再版)

訂正 柔術極意教授圖解

西洋綴總クローズ

紙數三百餘頁

金文字入頗美本全一冊

特別正價金三十五錢

郵税八錢

智育開け徳育進むも体育完全ならざれば是れ鼎足
一と欠けるあり我教育家は歐風教育を主とし体操
術を採用すと雖ども彼体操は西洋の小技徒に四肢
を運動せしむるに過ぎず争かて國有柔術の身体發
育に利ありて敵を防ぎ身を護る實用的要術に如か
尤先生斯に見あり諸大家の贊助を辱ふし本書を著
はじて斯道を擴張し兼て流派百出流法亂れ眞術の

瀝瀝せんと恐れ秘訣蘊奥を惜まず手解より初段
中段、投捨、秘傳、口傳、崩形、極意上段、亂捕
等百五十餘手と起死回生の人工呼吸術に至る迄各
術一々數個の密圖二百五十餘を挿み丁寧親切手を
以て教へん計りに平易に説明したれば以て教科書
とすべく以て獨修の書とすべし世の教育家兵士醫
官學生は勿論我國の富強を願は、必ず一本を得よ

